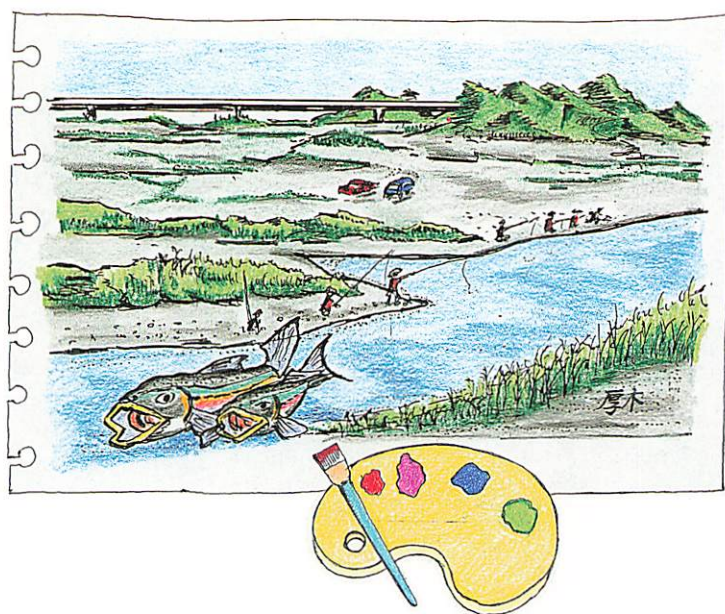


第11回 教文研教育シンポジウム記録

# 子どもを再発見する道を探る

—— スクールカウンセラーをむかえて ——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・浅見 聡

(神奈川県立看護専門学校講師)

・カ石 絹子

(小田原市立酒匂中学校教諭)

・木下 泰子

(教育相談室・専任カウンセラー)

・中野 早苗

(スクールカウンセラー)

コーディネーター

・広瀬 隆雄

(桜美林短期大学助教授)

1998年2月21日(土)

於：厚木シティープラザ・勤労福祉会館

## シンポジウム

### 子どもを再発見する道を探る


—— スクールカウンセラーをむかえて ——

○司会（滝沢事務局長） 本日は、シンポジウムに多くの方々をお迎えでき、大変嬉しく思います。まず、開会に先立ちまして、県教文研の稲垣所長よりあいさつをいただきます。

#### 県教文研所長あいさつ

○稲垣県教文研所長 神奈川県教育文化研究所長の稲垣です。本日は、私ども主催のシンポジウムにわざわざご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

最近のマスコミの報道で、私も、子どものナイフによる殺傷事件に大きな衝撃を受けました。私たちの時代には、子どもが切り出し小刀を持っているのは常識でした。なぜならば、それを学校へ持っていったわけですから、当然みんなナイフを持っている。鉛筆を削るのはナイフだというふうにもう決まっていたわけですから、



古代からナイフは文明の利器でありますけれども、当然刃物ですから、それが使い方によっては凶器になることは、誰もが承知していることだと思っております。それを「ムカつく」とか、「キレる」ということで、簡単に子どもがナイフを凶器として使うことに大変愕然とするものがあると思います。

文部省がはじめや不登校の問題等の対策の一環として、スクールカウンセラーをテスト事業として導入してから三年になりました。神奈川県教職員組合は、このスクールカウンセラー導入に賛成の立場をとっていますけれども、先日の日教組の全国教研集会でも、カウンセラーの導入に賛成の立場と、同時に消極的な、批判的な意見もあつたことは事実であります。

きょうは、お忙しい中をスクールカウンセラーの方にもシンポジストとしてご参加をいただきました。皆さんとともに今後の子どものあり方、スクールカウンセラー制度のあり方をめぐって、お互いに考えることができれば幸いだと思っております。

最後に、本日のシンポジウムの開催にあたりまして、準備等に大変ご協力をいただきました湘北教育文化研究所の皆さんと、湘北地区教職員組合の皆さんにお礼を申し上げまして、簡単ですが、主権者を代表してのあいさつといたします。よろしくお願いいたします。(拍手)

○司会 引き続きまして、今、お話がございました、湘北十二市町村と広域な行政区域を抱えております、湘北教育文化研究所の島崎所長より、あいさつをいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

## 湘北教文研所長あいさつ



○島崎湘北教文研所長 皆さん、こんにちほ。ただいま紹介をいただきました湘北の教文研の島崎と申します。

厚木は湘北のエリアで一番南でして、北の津久井とか、相模原は、まだ先月の雪が残っております。そういった広いエリアの中で学校は二四三ございませうけれども、さまざまな取り組みをしております。

先ほど（県教文研）所長の方からも話がありました、今日的な子どもを取り巻く状況というのは極めて厳しいものがあります。私がいつも感じているのは、大人と子ども、あるいは子ども同士、大人同士の言葉のキャッチボールが今非常に不足しているなということです。そういった意味では、言葉のキャッチボールがもつとできる場面があればいいなということを感じているわけでございます。

相模原の方でも、五年前文部省のスクールカウンセラー配置に先立って、市独自に週一回学校に派遣をしていただくような制度が開始されました。その後、私も相模原に勤務をしているものから、相模原の実践に、あるいは研究のお話を伺いますと、スクールカウンセラーの方との連携をどう保つていったらいいか、あるいは教職員の子どもに対する接し方も含めて、スクールカウンセラーの先生方には、ご支援をいただき、非常に大きな成果があったという報告をいただいております。

私たちはやはり子どもと向き合う中で、先ほど申しましたように、言葉のキャッチボール、心のキャッチボールをしていくことが仕事ですから、教職員の共同の作業の中に、スクールカウンセラーの

制度というのは非常に大きな意味があるように思います。

きょうのこのシンポジウムが私たちにとって、子どもとどうかかわっていくかということを学ぶ非常に良い学習の場だと感じております。そういった意味で、私も参加をさせていただきますれば、本日はよろしくお願いいたします。ありがとうございます。(拍手)

○司会 それでは以後の進行につきましては、コーディネーターの広瀬さんの方をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。



## シンポジウム



○広瀬（桜美林短大助教授・コーディネーター） 本日のシンポジウムのコーディネーターを務めさせていただきます。よろしくお願ひします。

きょうのシンポジウムのテーマは、「子どもを再発見する道を探る」ということです。最近の子どもの状況をどのようにとらえるかということについての話し合いができればと思います。

一般的に、子どもの問題状況についてのシンポジウムの場合には、シンポジストと言いますと、学校の先生か、親か、あるいは子どもの問題について詳しい専門家とか、評論家といった人たちが壇上に上るのですが、きょうは、そういう人たちではなく、スクールカウンセラーの方をお迎えして話し合ってみたいと思います。

スクールカウンセラーというのは、学校の内部の人間でもないし、また、外部の人間でもないという、その境目にいる、非常に変わった存在の人です。そういう人たちの目から見た、今の子どもたちの状況についてお話ししていただきたいと思っています。

せっかくスクールカウンセラーの方がいらっしゃっているわけですから、子どもの問題状況だけではなくて、スクールカウンセラーをめぐる問題についても、いろいろ話し合いができればと思います。早速シンポジストの方々にお話ししていただくことにします。

まず第一番目は、中地区の中原中学校で約一年半ほどスクールカウンセラーをおやりになつていられる中野さんです。それでは中野さんよろしくお願ひします。



○中野（平塚市立中原中学校ルカウンセラ―） 皆さん、初めまして、スク―ルカウンセラ―をしております中野早苗と申します。

まず、スク―ルカウンセラ―というものについて少しご説明をしたいんですけども、私が務めましたのは文部省の事業のスク―ルカウンセラ―です。正式には「スク―ルカウンセラ―活用調査研究委託事業」という長い名前なんですけれども、これは、平成七年度にスタートしました。国が予算を出しまして、その実施

については各都道府県に委託をするというものです。二年間の調査研究ということになっております。

神奈川県の場合は、平成七年度には県内三校、内訳は、高等学校一つに、中学校二つ。それが翌年（平成八年度）になりますと、県内十六校になりました。これの内訳は、高校四校、中学校十校、小学校二校でした。今年度（平成九年度）は三十二校になっておりまして、内訳は、高校十校、中学校十六校、小学校六校と、今これだけの学校にスク―ルカウンセラ―が配置されております。

神奈川県教育委員会は、スク―ルカウンセラ―の人選を神奈川県臨床心理士会という、臨床心理士の資格を持っている人たちの会に委託されたんですね。そこで私も神奈川県臨床心理士会の仲介を経て、平成八年度から今年度にかけて二年間、平塚市の中原中学校に勤務することになったわけです。

文部省は、この事業に関して幾つか基本線を定めています。それは週二日、一日当たり四時間程度、年間三十五週というものです。三十五週と言いますと、夏休み、冬休み、春休みを除いて、それから三学期は試験などがあったて、元アチーブメント・テスト（学習状況調査）と言われていたものの採点の期間が学校に入れなかったりしますので、そういう期間を除くとほぼ三十五週になり、それが基本線です。

この基本線にのっとった形で、私の場合は水曜日と金曜日、大体昼休みの時間帯から、放課後四時



半ぐらいまでの時間学校にいるようにしていました。保健室の隣の部屋を一室、相談のための部屋とすることで学校側が用意してくださいまして、ここに「相談室」という名前をつけました。昼休みと放課後は、この談話室に私が詰めていまして、相談してくる人を待つということで、授業時間中は職員室の方にまた机をいただいていたんですね。職員室では、先生方と交流したり、情報交換をしたりしていました。このほか一学期に一回程度、スクールカウンセラー校内研修会ということで、先生方の研修の講師をさせていただきました。それから、いじめなどのケース検討会にアドバイザーとして出席したりということもいたしました。

相談の対象は、その学校に在籍している生徒、保護者、教職員となっております。先生方との間で最初に話し合ったことは、相談はあくまでも自発的な相談を尊重しようということにしまして、「おまえはちよつとカウンセラーのところに行つて、カウンセリングを受けてこい」みたいな形での強制的なカウンセリングというものは、一切しないということにしました。

生徒からの相談が件数として最も多かったです。本当に自発的に自分の抱えている問題というものを認識して、それを解決したいという明確な意志を持って、よく生徒さんが談話室を訪れてきました。こういう形で個人の相談という構造がしっかりとれる、そういうケースの多い点が、中学校や高校にスクールカウンセラーが配置されることの良い点じゃないかと思えます。

それでは、相談活動を通して私が感じてきた中学生の心の問題について話を進めていきたいと思えます。

相談に来た子どもたちのつぶやきの中にこういうものがあつたんです。「私、もし今誰かに殺されても特に未練はないなあ。家族はちよつと悲しむかもしれないけど、ほかの人はどうってことないだろうし、将来やりたいことは別にないしね。勉強して高校に行つて、それでどうなるの」。こういうつぶ

やきは、今の中学生全般に共通する心の問題を非常に代弁しているのではないかな、というふうに感じたんですね。

このつぶやきの中に感じた幾つかのことを申し上げたいんですが、一つは、「透明な存在」ということです。これは神戸の事件でも、犯行声明文の中に出てきた言葉なんですけれども、「私がいなくなっても、みんなどうってことないだろう」という、そういう感覚ですね。「出る杭」になってしましますと、いじめられたりということもあるの、「出る杭」にならないように、自ら「透明な存在」になろうとしているところもあるんでしようし、また、「透明な存在」であることにさみしさも感じている、そういう面があるように思います。

また、「将来やりたいことも特にないし」という、夢や希望が持てない状況なんですね。それから勉強、部活、生徒会活動というものがあるわけですけども、そういうものすべてが何かやらされているような、そういう感覚が子どもたちの中にあるのかなと思いました。

勉強して高校へ行くことが、もう子どもの当然の義務のようになってしまっていて、子ども自身がかうしたい、ああしたいというような欲求を持っていない。その先の目的が見えていないというところがあります。最近では、子ども自身が欲求を持つ前に、大人の方がほとんど課題を与え、押しつけてしまう、そういう状況が非常に多いと思います。部活だとか、生徒会活動というものは、子どもの意志で参加できるはずなんですけど、どこか、あるからやらなければいけないものになってしまっている。そういう部分があるように思います。部活なんかはきちんとやっていた方が内申書に有利だというふうに、親子の方は思ってしまったていますので、本当の意味で自由でなくなっていると思うんです。また、生徒会活動も毎年毎年ある程度形の整った活動をさせようと大人が手を出し過ぎているように思います。

スクールカウンセラーは、ふだんは談話室に詰めていて、相談に来る生徒さんを待っているわけなんですけれども、ただ、顔も知らない人のところに相談に来ようとはなかなか思わないだろうからということで、時々顔見せの機会をつくっていました。学年集会でちょっと話をさせていただく機会を持つたり、また、学級単位で、出かけていって、「カウンセリングってこういうことをするんですよ」というような話をさせてもらったりします。あるときの学年集会でPRを十五分ぐらいさせていただいたときに五分もたつと、ザワザワと私語がすごいです。もうその時点で話をやめて帰りたいなってしまうんですけども、ほかの人の話によれば、どの学校でも似たような状況があるというのを聞きました。多くの子どもたちは学校でやるものはすべてやらされているものという、そういう感覚があるのではないかなと思います。内容を聞く以前に拒否反応をしてみている子どもたちがかなりいるように思います。またこういうつばやきも相談の中であつたんですね。



「大人って一体何やっっているんだろうと思う。環境の問題だつてずっと前から問題になってきている、ちっとも解決できない。しつかりしてよ、と思う。それに政治家は汚職したり、平気で悪いことをしている。どうして大人はそんな人を選挙で選ぶんだろう」と。

大人、政治家、社会が信じられないという思いなんです。大人として本当に耳が痛いんですけれども、大人自身がある意味で政治に期待していいところがあると思うんです。一市民として世の中を変えていこうと努力している姿というものを、子どもたちに余りにも見せていなさすぎるので、子どもたちがこういうふうに通つてしまうのも無理がないのかなと思いました。

このことが夢や希望を持ってないということにもつながっていると思います。世の中は、私のやり方次第で変えていける。自分の人生は変えていけるといふような、そういう思いがないんですよね。それは多分大人自身がそういうふうになんか本心に思っていない。そのように行動していかない。あきらめてしまっている。そういう大人の無気力が影響しているんだと思います。

それから、こういうつぶやきもありました。

「友だちも信じられないな。何か話をするときは、この人、話して大丈夫な相手か、この話はしても大丈夫な話か考えてから話すようになった。だって、うっかりするととんでもないわきになつて広まったりするんだもん」

友だちも信じられないということ、まるで大人のようなつき合い方をしているんですね。今の子どもたちは、人格形成に非常に重要な役割を果たすと思われる、恐らく子ども時代ならではの人の対する純朴な信頼感というか、こんなふうにあれこれ気を使わないで人とつき合える時代というもの、そういうものを経験できないでどんどん成長してきているように思います。

さらに、こういうつぶやきがありました。

「先生たちはずるいと思う。ルーズソックスやスカートを短くするのや、茶髪、ピアスはだめと言っているのに、先生に注意されても聞かない人たちにはもう何も言わない。守っている私たちがばかみたいという感じがする。そういうのを認めるんだったら、服装や茶髪、ピアスのことは自由にしていいってみんなにちゃんとやってほしい」

普通の、割に従順な子どもたちがストレスをためているという現実があります。

最近、我慢のできない子がふえてきていると一般的に言われています。もしかしたら本当に食べ物が変わって、カルシウム不足だとか、また、ダイオキソンの影響だとか、そういういろんな意味で、生物学的な変化みたいなものは実際に起こっているのかもしれないと思います。また、とても個人主義的で無責任な家族がふえてきていることも事実だと思いますので、家族で最低限のしつけをされていない子どもたちというのにもいることは事実なんですけれども、しかし、割にしっかりした家族で一応のしつけはされているのに我慢ができない子どもたちが多いのは、しつけだとか、大人からの干渉に息詰まっている子どもたちの姿なんじゃないかと思います。

また、学校の管理体制に矛盾があるということがあるんですね。最近では服装を自由にするとか、そういう形で管理を弱めるということを積極的に取り入れている学校も出てきていますけれども、でも、学校には根強く、「非行は服装の乱れから」みたいな考え方があって思うんです。服装のような割に小さなことからしっかり管理していこうというような学校では、ある程度従順な生徒に対しては厳しいんですけども、反抗する生徒に対しては事実上甘いということになってしまっています。八割から九割の生徒はルールを守ろうとしますし、また、教師からの管理が有効に効くわけですから、残り一〜二割の反抗を押し通してしまう生徒たちに対しては、先生たちは何もできないという現状なんです。こういう子どもたちは「無理が通れば道理引っ込む」ということを体験的にわかってしまってい

るので、怖いものなしになってしまいます。その結果、他人に迷惑をかけない程度の問題行動は、ある程度コントロールができるんだけれども、人に迷惑をかけたり、また傷つけたりしてしまう本当の意味での問題行動がコントロールできない、そういう矛盾を含んだ態勢になってしまっていると思います。

また、従順な子どもたちの中には葛藤があります。ちょっと勇気を出して、その管理を越えてみたいという思いがあるわけです。でも、越えてしまうことはやはり怖い。越えられないでいる自分をふがないと思う気持ちもある。でも、やっぱり越えない方がいいという思いなど、いろんな葛藤があります。あるとき何かのきっかけで、「キレた」とかいう言葉が使われますけれども、そういう状態になると、それまで従順だった普通の子が急に管理を飛び越えて暴走してしまう。それが昨今連続して起こっている少年犯罪の多発につながっているように思います。

最後に、スクールカウンセリングの課題を申し上げたいんですけども、この子どもたちのつぶやきに相談活動を通して耳を傾けることができたことは、本当によかったことであり、また、子どもたちも誰にも話せないよりは、話を聞いてくれる相手があったことでよかったのではないかと思っています。最も多かった相談は、友人関係の悩みだったんですけども、話を聞くことによって、話している子どもが自分の気持ちだとか、自分の置かれている状況、自分の友だちの状況について整理をすることができて、だんだん自分なりの解決方法というものを自分で見つけていけたという、ケースはたくさんありました。

二年目に入ると、深刻ないじめの問題ですとか、また、摂食障害のような重いケースの相談もあつたんですけども、先生方と連携をすることによって、こういった生徒さんたちを援助していくこともできてきました。

ただ、どんな問題も根本的な解決に近づけるのにはいろいろと障害があります。実感としては、膿んでしまっている傷口にとりあえずばんそうこうを張って、血が流れ出るのだけは止めているという、その程度の処置しかできなかった感じはあります。

一つの原因は、現在表に出ている問題の多くは、小学校時代、または幼児期からのさまざまな要因がもとになって起こってしまっている問題だということなんです。そういう意味では、むしろ中学校よりは、小学校にカウンセラーを配置した方が、まだ治療的なかかわりがしやすいのかなと思います。もう一つは、先に申しましたように学校の体制に矛盾があつて、それを敏感に感じ取って不満を持つていたり、また、問題行動を起こしたりする子どもたちの問題を解決するためには、やはり学校の体制自体を改善していかないとだめだと思います。

このようなことは、一学期に一回行ってきた校内研修会の場で先生方に対して発言はしてきたんですけど、ただ、学校の体制が変わり始めるところまでには、二年間では到底届きませんでした。その考え方に賛同してくださる先生がいらつしやるという実感もあるんですが、学校全体のやり方の方向を変えていくには、まだまだ距離があるように思いました。単に悩みを聞いてくれるカウンセラーが学校に入るといっただけではなくて、学校のあり方も改善されるということが並行して起こってくれば、もっともっと効果が上がるのではないかと思つています。以上です。

○広瀬 どうもありがとうございます。

日常的に子どもたちと接する中で得た子どもたちのつばやきの紹介と、それからスクールカウンセラーの課題ということで、たんに悩みを聞く、という対応の仕方だけではなくて、もっと根本的な解決、対応の仕方を考えていかなければならないというお話でした。

次は、そのお隣に座っていらつしやる木下さんです。木下さんは、文部省委託のスクールカウンセ

ラーではありません。しかし、日常的にやっている仕事はスクールカウンセラーの一般的な仕事です。名前は、「学校カウンセラー」という名称になっています。スクールカウンセラーとは勤務時間、勤務形態が大きく異なっています。詳しいことについては、ご本人の方から説明があると思います。よろしくお願ひします。



○木下（教育相談室専任カウンセラー） 木下です。よろしくお願ひいたします。文部省のスクールカウンセラーの取り組みについては、中野さんのお話で具体的にわかりたいと思います。最近それは別に新しいスクールカウンセラー事業が始まっております。そのことについて私の経験も含めて、まずお話ししたいと思います。

先ほど相模原のお話もありましたけれども、各自治体が独自にスクールカウンセラーを採用するという、新しい事業があちこちで行われています。具体的に申しますと、市や町の教育委員会が教育相談、あるいは子どもの心理療法の経験のあるような、おおかた臨床心理士の人が多いようですけれども、そういう人を雇って学校に派遣するという形です。この場合、決められた一つの学校を担当するのではなく、複数の学校を受け持つというスタイルが多いようです。身分は非常勤、あるいは嘱託員という形が多いようです。

文部省のスクールカウンセラーが一校について二年というふうに限定されているのに対して、もう少し長期の見通しで事業を組んでいるようです。私は、県教委の教育相談員なんですけれども、一方ではそうした流れに乗りまして、昨年の五月から横浜市の学校カウンセラーとして週四日働いています。文部省の事業と区別して独自性を打ち出すために、あえてスクールカウンセラーとは言わずに、「学校カウンセラー」としたそうですが、名前だけではなくて、仕事の内容もかなり違ってきます。



横浜市は十八の区がありまして、各区一人のカウンセラーを配置するという計画で事業がスタートいたしました。現在は十四人、来年度には十八人がそろう予定になっていきます。文部省のスクールカウンセラーとの大きな違いは、先ほど言いましたように、複数の学校を担当するということです。私の場合、金沢区の小・中学校三十三校を担当しています。学校から「子どものことで相談したい」という要請がきまして、そこで初めてその学校へ出向いて行って相談を受けるという形です。言ってみれば、出前の教育相談をやっているようなものなんですけれども、学校で、担任の先生、それから校長先生とももちろん話し合いをしますけれども、子どもと親のカウンセリングをすることが仕事の中心になっています。

相談の要請は、多い学校と少ない学校、全くない学校といろいろあります。その辺は学校のニーズにすべて任せられています。また、勤務時間の半分は区役所の保健所に派遣されているところも、文部省のスクールカウンセラーとは大きく違っている点です。

ここでは、保健婦さん、保母さん、それから教職経験のある方と一緒に子ども全般、つまり、乳幼児の育児相談から、小・中・高校生までの不登校、いじめ、さらに進路に関することまで、幅広い相談にあたるという「子ども家庭支援センター」という部署に配属されています。この事業も去年の十月からスタートしたばかりで、市民にどれほど役に立つのかは、これから問われていくことになるのではないかなと思います。

保健所というのは衛生局ですから、学校カウンセラーは、学校へ訪問に行くときには教育委員会の仕事、保健所にいるときには衛生局の仕事もしていることになります。つまり、二つの顔を持っているわけですね、このことによる難しい問題点も幾つかあります。

ところで、文部省のスクールカウンセラーは現在常駐ではありませんけれども、週に二日、学校の

決められた場所に大体いますから、子どもたちの学校生活の悩みをその場で聞いてかかわっていきま  
す。ところが、私たちは出前の教育相談ですから、ふだんは学校現場にいません。しかも、要請は校  
長先生を通してきますので、日常的な相談というのではなく、学校としてもいろいろやってみたいけれ  
ども、なかなかうまくいかない、どう対応していいかわからない、そういう相談ですね。つまり、か  
なりこじれたケースや、症状の重いケースを依頼されます。

子どもや親と面接する中で、このこじれた関係の糸をひもといたり、症状の意味を理解してこう  
というわけですが、こうしたケースは二〜三回のカウンセリングではなかなかうまくいきません。中  
には二年、三年と時間をかけてやっていかなければならないケースもあります。そうしたときに学校  
側からすぐに効果、あるいは結果を期待されますと、私たちは非常にづらいわけなんです。カウンセ  
ラーは本当に役に立つのかといった疑問も、先生方から当然起きてくるはずですので、私たちは自分  
の仕事のやり方をきちんと説明していく必要があります。その辺がまた随分難しい問題だと思いま  
す。

カウンセリングは学校の授業に比べますと、かなりゆつくりと時間を使います。もちろんこれは心  
理的な時間という意味でもありますが、心の中で起こっていることを、言葉やそれ以外のもの  
を使って表現してもらいまして、それを丁寧に拾っていった、さらにそのことの意味を読み取ろうと  
いう気の長い作業です。ですから、そういう点ではやや異質なものが学校の中に入っていくわけです。  
それを受け入れる難しさは当然学校側にはあると思います。私たちも教育や、学校のシステムについ  
ては知らないことが多いわけですから、戸惑うことがたびたびあります。しかし、異質なものが交わ  
れば、そこから新しいものがまた生まれてくる可能性もあるはずで、現場の先生方とお互いの感じ  
方を話し合う、そういう機会があればいいなと思っておりますが、現実にはまだまだそういうコミュニ

セッションはとれていません。これもすぐにやろうとあせると、多分うまくいかないだろうと思っています。

私が今まで経験した中で、一番無理なく先生と相互理解できたのは、やはり子どもの問題に一緒に取り組んだ時です。担任の先生は教育の視点で、私たちカウンセラーは心理臨床の視点で子どもを見ますから、そこに違いがあります。しかし、お互いの感じ方を出し合ってすり合わせることで、子どもの理解の幅が広がっていきますし、お互いの役割というものもそこで明確になっていくと思います。クラス三十数名の子どもたちに同時にかわりながら、一人ひとりのことも考えていかなければいけない、そういう担任の先生のご苦労も現実感を持ってそこで理解することができますし、カウンセラーが親や子どもと会い、どんなことを感じているのか、守秘義務を超えない範囲でお伝えすることができれば、担任の先生も何かそこで感じ取っていかれる、そういう関係が保てたときに、何故か親も子どもも少しずつ変化していくことになります。もちろんいつもこんな関係が持てるわけではありませんけれども、私は、やはりケースを介して教師とカウンセラーが理解し合うスタイルが一番好きです。非常に地味なんですけれども、それが最も確かな方法かと思っています。

今日は「子どもを再発見する道を探る」というテーマですから、そちらの方向にもう少し話を発展させたいと思います。

具体的な例を何か挙げた方がわかりやすいので、ある事例について簡単にお話します。これは今私がかかわっているケースなので、少し内容を変えてお話しします。

小学校一年生の男の子なんです、学校へほとんど行けないという状態が一カ月ほど続いています。いわゆる不登校です。不登校と言いますと、はじめがあったんだろうか、勉強についていけないんだろうか、あるいは先生にしかられてしまったんだろうかと、その子どもの気持ちにマイナスに働くこ

とをいろいろと想像するわけなんですけれども、担任の先生に聞きましたも、それらしいことがなかなか見当たりません。本人も「どうして行けないのかわからない」と言うんですね。こういう状況の中、親や先生に勧められて、何とか登校するという日もあったようです。そんな日は遅刻もしません。朝からまじめに勉強をしますし、友だちとも仲良く遊んで、とてもクラスになじんでいる。ですから、担任の先生は、「どうしてこの子が学校へ来れなくなってしまうのか理解できない」とおっしゃるわけです。言ってみれば、申し分のない良い子ですから、不登校になる理由がなかなか見つからなかったわけです。

実は、この申し分のない子だということが問題だったようです。この子はひとりっ子で、お父さんはいわゆるエリートサラリーマン、お母さんは専業主婦と経済的に恵まれた家庭に育っています。お母さんの話によりますと、「決して英才教育はしない方針だけれども、素直な良い子に育ってほしい、そういう思いで子育てをした」ということでした。学校の話では、一年生の一学期、二学期というのは、どんな子も必ずできることしかやらないそうです。ですから、できる子、できない子という差が出ないそうです。ところが、三学期は少し難しいことが入ってきて、個人差が始める時期だそうです。この子はどんなことでも大体でできましたが、このころから友だちとわずかな差が気になり始めて、「何でも完璧にできる自分になりたい」と強く思うようになりました。そうすると、ちよつと苦手なことがありますと、それにとらわれてしまって登校が苦痛になったというわけです。

学校を休んでいまして、家では勉強しますし、お母さんの手伝いもする。「学校へ行かないということを除けば、何の問題もない普通の子だ」というふうにお母さんはおっしゃいます。では、なぜこんなことになったのか。いろいろお話を聞いていくうちに、この子にはオール・オア・ナッシング、の発想があることがわかってきました。学校へ行くんだったら、遅刻もしないで、朝から行って完璧

にうまくやりたい。うまくやれないんだったら行かない方がいいという具合です。

両親はとてもまじめな方で、特にお父さんは、何とか息子を立ち直らせたいと強く思っていましたので、やがて会社を休んで、息子を学校まで送るようになりました。二三日は本人も我慢をしてお父さんに従っていましたけれども、翌日、お父さんに送ってもらった後、そのまま教室には入らずにっそりうちに帰ってしまったそうです。そうなるのはむしろ当然だったんですけれども、そのことにショックを受けたお父さんは、もうそれからは「学校には行かなくていい」という姿勢に変わってしまったんです。このお父さんの変化も極端で、オール・オア・ナッシングの発想なんです。

この不登校の子の完全癖というのは、実は家庭の中で親から無意識に伝えられていたんだということがわかってきました。日本には昔からけじめをつけるのがよいという発想がありまして、家庭でも、学校でもけじめのある生活をしようというふうに教えられています。これはもちろん大切なことで、けじめのない教育では人間は骨抜きになってしまいます。しかし、中途半端やあいまいなものをごんごん排除していきますと、今度は逆に大人も子どもも生きにくくなっていくように思います。あいまいなもの、混沌としたものの中から、創造性とか個性というの生まれてくるとも考えられます。すぐに白黒をつけてしまわずに、その間のちよどネズミ色ぐらいのところであれこれ考えて、そこから自分らしいものを発見していく。そのプロセスにつき合うことも時として必要ではないかなと思います。カウンセリングではそういうことをやるうとしています。今、学校教育の中にカウンセリングマインドを取り入れる必要があるとすれば、そういう考え方ではないかなという気がいたします。

ちなみに栃木のナイフ殺人事件で、不幸にも亡くなった女の先生は、多分とても教育熱心で、けじめのあるきちんとした先生だったんじゃないかなと思うのです。殺人を犯してしまった生徒も、もちろん問題はたくさんあったと思うのですけれども、先生ももう少し柔軟なと言いますか、言ってみれば

ばファジーな感覚で生徒を理解しながら、見守るといふ姿勢があつたら、命を落とすといふことはなかつたんじゃないかと思えてきます。

完全癱の子にしましても、ナイフで先生を殺してしまう生徒にしても、なぜそんなに極端になつてしまふのかといふことを考えてみる必要があると思ひます。その一つの理由として、体験不足といふことが考えられます。特に喜怒哀楽を伴うような感情体験が不足している気がします。

子どもは、親との深い心のつながりに支えられていろんな感情を体験します。しかし、その心のつながりといふものがだんだん弱くなつていふように思ひます。昔に比べますと、経済的には随分豊かになりましたから、親は子どもに対して、お金はたくさん使うんだけれども、心を使わなくなつてきたように思ひます。

また、近ごろは少子化が進んでいますから、親の目が子どもに行き届いています。これは一面では良いことですけれども、必ずしも良くないといふ面もあります。親の目が行き届きますと、子どもの自発的な行動の幅が狭められていく可能性があります。昔は、親の目を盗んで悪いことをしたり、危険なことをすることも、簡単にできたわけですが、今はそんなことは小さいころからできなくなつています。親の期待どおりのよい子に育つ、そういうレールが敷かれています。親は危険な刃物やマッチは子どもから遠ざけますし、友だちとけんかもしない子に育てますので、悪や危険の体験を知らない子になつていきます。子どもといふのは悪いことをしながら、時には大げがをしながら、自分の存在とか、能力を確認して、社会のルールもそこで覚えていくものですが、それが難しくなつていふように思ひます。失敗とか挫折の経験の少ない子どもは、一たん軌道から外れますと修正が効かず、自分をうまくコントロールできなくなつていきます。

完全癱の子で言いますと、ほどほどにやつていれば、まあいいといふふうには思えなくて、何でもう

まくでなければいけないという方向にいつてしまっています。ナイフ事件の生徒で言いますと、ムカつくんだけれども、グツと気持ちを抑えることができなくて、相手を殺すところまでいつてしまおう。つまり、加減ができないわけですね。今回のような事件がありますと、ますます大人は子どもから危険なものを遠ざけていくんではないか、そしてますます子どもをおかしくしてしまうのではないかと、うふうに、私は内心とても心配しています。

よい子というのは崩れると非常にもろいこと、また、時には危険な方向に行ってしまうということも考えますと、子育てとか、教育はそれほど単純なものではなくて、大人のありようそのものも問い直さなければいけない問題なのかなと思います。

今いろいろな事件がありますので、子育てに自信を持ってなくなっている親御さんが多いのではないのでしょうか。普通の子だからと安心していただけなのに、その「普通」というのも、何だか普通ではなくなってきた信じられない。家庭の教育力が低下していると言われますと、何とかしなければと思うんですが、厳しくしたらよいのか、優しくしたらよいのかわからないと、親は自分の価値基準そのものにも自信が持てなくなる可能性があります。そうなりますと、親や我々大人が自分の生き方をもう一度問いなおして、自信を取り戻す道を探らなければいけないことになるという気がいたします。

「子どもを再発見する道」は、実は大人が自分を再発見する、そういう道にもつながっているのではないかなと思います。これを私の一つの結論として、ひとまずここで話を終えたいと思います。

○広瀬 どうもありがとうございます。

中野さんの場合には、スクールカウンセラーということで、学校に週二回ほどですが、常駐しているんな子どもたちの悩みを聞いている。今お話していただいた木下さんの場合には、学校カウンセラーということ、木下さんもおっしゃっていたように、出前教育相談という形をとっているというこ

とです。ただ、それだけに深刻な内容の相談が多いということでした。

小一の男の子の不登校の事例などを挙げながら、子どもたちも教師もフアジーな感覚が必要である。あと大人の生き方が問われているのではないかということでした。

さて、これまではスクールカウンセラーの方々のお話でしたが、今度は学校の中で、スクールカウンセラーを受け入れる側の教師の立場からのお話をしていただきたいと思っています。小田原の酒匂中学校で一年生の担任をしていらっしゃる石石先生の方からお話をお願いします。



○石石（小田原市立酒匂中教諭） 私の務めます小田原市立酒匂中学校は、去年の四月からカウンセラーの委託研究を受けました。もう一年になります。私個人としては、このカウンセラーの先生を受け入れた研究校に勤務していたことを大変幸運に思いましたし、これからも多分そうだと思っています。そういう考えの中から、自分の事例を三つほどお話したいと思っています。

酒匂中学校のクラスでは、カウンセラーの方と直接接触をした方がいいなと思われる子がいるクラスと、いないクラスとありますが、まず一例目として、私のクラスで四月から学校に来にくくなった子の例を挙げたいと思います。

女生徒ですが、この生徒は、小学校のときの同じクラスだった生徒の話では、「小学校のときはとても元気だったよ」「普通だったよ」と言うんですね。この子のお母さんは「小学校まではとても元気で行っていたのになぜだろう」というふうに言うんです。私の方は過去の例を聞くと、成育歴のおなかの中にある状態から、家庭の問題がこの子を多分に苦しめたであろうと想像されるので、その辺のところから生きるためのエネルギーが切れてきたのかなというふうに感じていました。四月からこの子の状況はだんだんと重くなっていったんですが、受け入れて、実際に生徒と接触を持つ機会が整っ



てきたのが七月の初めごろで、早速面接の折りに私の方からお母さんに勧めてみました。「談話室でお話を」ということなんですね。お母さんがその時に思われたことは、カウンセラーの方とお会いしてすぐにでもこの子が学校へ行くようになる方向を答えてもらえるだろうということでした。

具体的には、七月の夏休み前に親子三人で面接という形をとりました。私や養護教諭の先生が、ちよつとその辺をバックアップしていたんですけれども、相談に行くについては抵抗はなかったのですが、いろんなことを私たちが言い過ぎるといけないかなと思つたんで、とにかく「行つてらっしゃい」とだけ言つて行かせました。

帰つてきて、保健室に寄つていただいて、親子と、私と養護教諭とで、「どうだった」というふうな感想を聞きました。そうしたら、お母さんは「がっかりした」と言うんですね。それはなぜかと言うと、「話を聞いていただいて、それだけだった」と言うんです。で、子どもはと言うと、「うーん」つて、もともと表現が下手な子ですからそれだけだったんです。私と養護の先生は、そこで、もう少し前にその意図を言つておくとよかつたなと思つたんですけれども、後からになつてしまいました。「まずこの子の気持ちや状況を話すところから始まつて、答えをもらうということではなくて、どうしていったらいいのかなつて、親も、子も考え始めるスタートなんですよ。」ということを話しました。そのことは、後でカウンセラーの方に話しておきました。そうこうするうちに何度かカウンセリングがあつたんですけれども、お母さんは、最初の思いを払拭することができずにやめてしまいました。本人もやめてしまいました。私と、そのカウンセラーの先生とのかかわり方の中で、とても教えていただいた、よりどころになつた過程をこれから申し上げます。

まず、四月半ばごろから休みが多くなつたので、家庭に伺つていろいろ話をし、「じゃあ、ちよつとも来られたらいいね」ということの中で、生徒本人が「友だちが迎えにくるのはいやだ」と言つた

んです。「じゃ、私ならいい？」って聞いたたら、「先生に来てもらいたい」と答えるんですね。私は、結果として七月の終わりまで毎日車で迎えに行きました。来れる日もありますが、来れない日は本人がバジャマの上に着をはおって、「行けない」って、暗い顔をして私に告げるんです。私はそのことをとても悩んだんですね。行かせた方がいいのかどうか、車で迎えに行くということがそうした状態では普通なのか、そうでないのか、この子にとっていいのか悪いのか、とても悩みました。連れてまで来させるという感覚は私にはなくて、何とかこの子が来られるならば、何をしても、どんな手段でも、この子が嫌がってさえないじゃないかって、そういう思いで迎えに行っていたんです。相談をいたしました。もししたら、私自身がいやならば、めんどうならば即やめた方がいい。でも、そういう気持ちがあれば続けてみたらどうでしょうかという答えをもらったので、「あつ、専門の先生から見ても、この方法は特にいけないわけではないんだ」ということで、自分自身が安心して一学期間それを続けることができました。

結果的には、五月ごろが一番落ち込んでいたんですけど、一時間来て帰るといふ状況が、だんだんと七月の終わりごろには二時間ぐらいいまで頑張っていたような気がします。顔もだんだん明るくなっていきました。ところが、「専門的にはとても重いお子さんですね」という答えをいただいていたので、私もあまり「二時間頑張れたんだから三時間、もうちょっとやってみようよ」なんて無理なこととは言わないまま、夏休みを迎えることになりました。

秋になって、九月の第一日目に迎えに行ったときは顔付きが全然変わっていました。無気力で、目も動かない、顔の表情もない。「これはしまった、長い夏休みが随分影響しているな」というふうに思いました。それからは一週間続けて迎えに行ったんですが、毎日「行けないよ」と言う暗い顔を見るにつけて、また、あらためて相談しましたら、

「一度ここで切りましょう。そして親子とのつながりが、ここで切れては、本人に見捨てられた感が残るので、第二教育センターへ相談に親子で行きましょう。」

ということを、うちに来ていらっしやるカウンセラーの方から親に告げていただきました。そしてら答えをもらいたい親は、第二教育センターならもらえるかなという思いで多分子どもを連れていったんだと思います。現在も月一回お世話になっておりますが、そこで返事をいただいたのは、「状況をみて、登校刺激はしない。親も学校も、即その日から実行してください」というようなアドバイスだったので、私の方も時々電話をして「元氣？」なんていうようなことはもう一切やめることにしました。そこでまたアドバイスをいただいたことは、「このまま途切れると本人が混乱する。不安になる。だから、担任の方が手紙を出したらどうでしょうか」と言われたんですね。その手紙で「元氣ですか、何やってる？」なんていうことを聞くと、家で何にもできない、何にもしない、学校へも行けない不安に駆られている本人が非常につらいので、私自身（担任）とのつながりということが大事なのだから、私自身が、例えばこういう本を読んだ。おもしろかった。それだけでいいからはがきで出してごらんなさいと言われたんですね。

で、やってみました。非常に寒かった日に、「きょう雪が降ったよね。私は雪が大好きだからうれしかった。さよなら」というそれだけの手紙なんです。そういうのを続けていて、本人から一月の終わりにごろに学校へ急に電話がかかりました。「二月九日になってから行く」と言うんです。「いらっしやい」というと、すごく元氣な、明るい声で「行く」と言うから、本当に来れるのかなと思っていたんですが、やっぱりその日が近づくにつれて家で暗い顔になっていきました。とうとうお母さんから私の家に電話がかかってきまして、「先生に迎えに来てもらいたいと言っている」と非常に明るい声で言われたんです。私はそのときには、一学期は来てほしい一心で迎えを続けていましたが、第二教育セン



ターでカウンセラーの先生と話をするにつれて、かえって自立を妨げる。登校刺激を一切しないで、本人の生まれくるエネルギーを持って、本人が行くと言わない限りどうしようもないということだったので、迎えに行くことを瞬時ためらう自分がありました。それで「えっ」というような感じが本人に伝わりました。「あっ、先生は自分を迎えに来てくれない嫌がっている」というふうに感じ取ったんですね。結局はもう来れない、風邪を引いたということになったんです。

そのときにもいろいろ分析をしていただいて、私が迎えに行くという気持ちが変わっている以上は、それを偽ってまで迎えにいかなくても何にもよくはないだからといって見捨てているわけではない。このことを必ず伝えた方がいいですということなんです。しばらくして私の方から、「ぐあいよくなったっ」というふうに連絡しようと思っていたら、本人からかかりまして、「やっぱり行けない」と言うんです。まあ、それでいいでしょうと。お母さんの方とは、ただ行こうと思っていたことが、きっかけとしては、

私が今度は迎えに行かないよということで、また振り出しに戻ったわけですから、お母さんがこのことで落ち込まないで、逆にチャンスにして、また次回にめぐってくる時を待とうという方向で話し合いましようということで、私とカウンセラーの先生と、それからお母さんとで三者面談を行う予定でいます。

このように私が困ったとき、合理的にやろうと思えば自分の判断でやれるけれども、どうなのかなって迷いながらやっているときに、道をつけていただき、大変ありがたく思いました。

それからもう一つびっくりしたことは、私が四月から七月ころまでかかって得たその子の分析というものを、私が一時間弱お話ししたら、その子の裏にある問題点、それから今の現状というのを明らかに分析して下さったことです。最初に申し上げたように、そこに勤務する自分の幸運というものを私は、その時感じていたんですね。

それからもう一人です。ある時、教室にガが飛んできたんですね。そのりん粉がいやだという拒否反応で、約三時間廊下に、動かないというかたくななところがある子です。両面を持っている非常に困難な子なので、どうしたらいいか毎日大変なんですけれども、お母さんの方からその先生に会いに行きまして、それ以来家での対応の仕方というのが、だんだんと変わってきているように思うんです。本人にも、個人的に会いに行くようにと私は勧めました。余りに状況がひどくなったときに、「相談してみたら」と言いますと、「何で私が行くの」と言うんですね。

「こういう、こういうわけなんだよ。みんなも風邪を引いたら病院へ行くし、自分の心の中で困ったことがあつたら行く。普通じゃないの。」

というふうに言つたんですけど、後でお母さんに言つた言葉が、「私は病氣なの」というふうに言つただけなんです。

そんなことから考えると、ちよつと飛躍するんですけど、私自身はこのカウンセラーという制度を、小学校の一年生が入学するときから、既に学校にいる方、学校の機関の一部というふうになっていけば良いと思いました。入学以来共に過ごしてきていけば、どの新入生にも、「そこにいる人」というふうになり、私が申し上げたような、子どもの考え方はなくなっていくんじゃないかと思います。ちよつと自分が大学へ行っていたところに、相談室というのがあります、ちよつと悩んだときに行ってみたんです。そこに相談できる先生がいらしたのです。こんなことが小学校一年から日本の社会に定着すればいいんじゃないかなと思います。

まともめすと、専門知識と、それから臨床例をたくさんお持ちのこういう方と接していると、私たちはふだん経済的に生徒指導をしたり、あるいは少しだけ心の問題に触れて、自分も頑張ってみたりするんですけども、道に迷い込んで、自分の判断が正しいかどうかというのがわからなくなつて、自分のやり方に自信が持てなくなつたりすることがあるんですね。ですから、こういう方がいらつしやることは、我々職員にとって非常に支えになると思うのです。現状として、私以外でも学校の職員は、何かあれば、職員室にいらつしやるカウンセラーの方を、「ちよつと」と呼びとめて長い時間相談をしている風景をあちこちで見ます。

カウンセラーの方も、自ら進んで私たちと接触を持つようになつてくださっているし、「相談事ならいつでも」という雰囲気私たちに伝わるので、気軽に相談できるカウンセラーの先生が来られたことを幸運に思います。以上です。

○広瀬 どうもありがとうございます。

三つの事例を通して、スクールカウンセラーの人とのかかわりやそこから得たものについてお話していただきました。非常に頼りがいのある、適切なアドバイスをいただいたということ。ただ、

一番最初の事例にもあったように、スクールカウンセラーは万能ではなくて、子どもたち、あるいは親が相談しに行っても、何のアドバイスもしてくれなくてがっかりして帰ってきたという例もあったようです。

最後は神奈川県教育文化研究所で電話による教育相談を担当していらっしゃる浅見さんです。よろしくお願ひします。



○浅見（神奈川県立看護専門学校講師） 教文研で相談活動をやっています浅見でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

私も学校におけるスクールカウンセラーと同じように、直接子どもたちを教えている教師ではありませんし、遠くから電話で相談を受けているということで、非常にもどかしいところ、ここまでやっていいのか、あそこまでやっていいのか、ある意味でこういう言い方をすると誤解を生むかもしれませんけれども、ぬえ的な立場でやっている者です。

今回お話しようと思っていたことは、この「教文研だより」にほとんど書いておきましたので、学校の現場で、あるいは受付のところでお待ちになった方は、詳しくはそれを読んでいただきたいと思っています。

このところ教育相談を電話で受けていますと、客観的にその件数が減ってきているんですね。これはどういうことかなというところで、相談員の中でいろいろ話をする機会がありまして、その中に一つこういう意味がありました。学校での、あるいはその地域での教育相談体制がはじめの問題から端を発して、急激に充実してきたのではないかということです。それであれば電話の件数が減っても、それはそれでいいことだなと思っています。持ち込まれる相談のケースが余り多くないというのは、我々

の仕事としてはやや食い足りないところがありますけれども、社会的事象としてはいいことかなと思うわけです。

私が相談を受けていまして、対応するモットーとしていることは、私の生き方にもかかわってきませんが、余り無理をしないようにしようということです。どうも最近の子どもたちの状況を見聞きするにつけ、また、相談の内容一つとっても、先生も、ご家庭のお父さん、お母さんも、そして当事者の子どもも無理をしているケースについて相談に来るのかなと思うわけです。

話が非常に雑駁になりますけれども、私は、お手元の経歴にも書いてあるとおり、年齢的に言いますと、上は五十代の方から、下は、塾でアルバイトをしている関係上、中学生や小学生とも接しています。時には小学校の低学年のお子さんとも一緒に話をしますが、やはりまじめな人ほど悩みが多いというの、どこも同じ気がします。やはりまじめな方は、自分で完璧であるというところまでやらなきゃいけないということで、それが崩れるともうやめたとはせてしまうケースが非常に多いような気がします。

二月十九日にA政治家が自殺を図りましたがけれども、個人の論理観と社会の論理観とのずれが、お互いに完璧を期そうとすると、それらがずれた時にどうしようもない、死ぬしかないような結果を生んでしまう。子どもの場合には、「キレル」という話がありましたけれども、それもやはり同じような社会的な事象じゃないかなと思ったりするわけです。

例えば教育相談の中で、数年前になりますけれども、こんなケースがありました。小学生の子どもが、図工の時間に友だちの絵を描こうという時のことです。授業の中で、うちの子は友だちの顔ではなくて、頭の後ろを描いて、絵を持って帰ってきたというのです。お母さんからの相談なんです。「一体どういうことなんでしょうね」というので、話を伺ってみると、「どうしたの」と聞いたら、「誰



もはくと一緒に絵をかきたがらない。先生に相談したら、じゃ、あなたはペアを組んで描いている子の後ろ姿でもいいからかきなさいよ。」と言われたと言うんですね。私はその話を聞いて、本当に情けない、もう怒りを感じてしまつて、一体この先生の指導つてどういうんだらうかと。後ろ姿を描いている子どもの姿をイメージしたときに、一体どういうクラスなんだらう。人権侵害つて言つてもいいんじゃないかと個人的には思いましたが、そのときはもう非常に憤りを覚えて、「その先生、何とかありませんか」という話になつたんですが、月日を置いて考えてみますと、その先生にはその先生なりに大変なことがあつたんだらうなど。学級経営もうまくできていなかった、そのつらさみたいなのがいろいろあるんだらうなと思つたんですね。

私も含めて、ここに今日集まつている、全員がスクールカウンセラー導入、今回の動きに対して「万歳！」というわけではないと思つています。私のスタンスを言えば、ワン・オブ・ゼムといったある一つの枠組みを見直していく、壊していくきつかけにすぎないんであつて、それはスクールカウンセラーという、あるいは臨床心理士という一個の人間であつてもいいし、あるいは別の、有益な指示をしてくれる方が、学校で、生徒の評価に携わらないような第三者の方が学校に協力をしていくことが、いいことではないかなと思つたわけなんです。

もちろんいろんな意見があります。今までの教育の課題を行政は放棄したんじゃないかとそれはよくわかります。さらに現場をよく知らない者が外部からあらわれて、どれだけ効果があるかとか、いろんな批判を私は聞いておりますし、それはそれで大きな問題だと思つています。特に一点目の教育現場の課題も、教育のプロである学校の現場の人たちが解決する、あるいは文部省が解決するということなしに、外部の者を何かあてがいぶちのようにボンとやつて、「どうなるんだ」ということは理解できません。が、それでも一つのくさびとして、実際にその枠の中で苦しんでいる子どもたちや、どこに相

談を持つていつていいかわからない親御さんもあるわけですから、それが保健室であってもいいし、あるいは相談室であってもいいし、そういう選択肢一つとして、いっぱいふえた方がいいと私は思っています。

本当は、先程中野さんがおっしゃるように、我々大人が社会を変えていくことが、目に見えて子どもたちにとらえ切れないから、いろんな問題が起きてくるといふ、そこは本当にそうだと思うんです。だから、いじめの問題があつて、不登校という形で、子どもたちの方からSOSを出して、子どもたち自らがプロテストして学校が変わっていくとか、そういったことは実際は情けないことです。大人が先回りしてやらなければいけないのに、子どもの方からそういうふうになつてしまったというのは残念なことです。そういった状況を少しでも変えられれば、そういった人材をどんどん利用したらいいんじゃないかというのが私のスタンスです。

昔、神奈川にも専任カウンセラー制度というのがありまして、人的配置で言うと、ちょうど一九六七年



の段階で専任カウンセラーは県下二十地区で三十四名いたんです。ちょうど今、文部省のスクールカウンセラーの派遣の人数がこのぐらいなんです。この専任カウンセラーという制度、昔あった専任カウンセラーという制度は学校の先生なんです。教師のカウンセラーなんです。そのところが違うんじゃないかとおっしゃられればそうですね、学校の中で授業を特に多く持っているわけでもないし、学校の雑務からは離れているし、当初は巡回型でやっていらつしやったと言うし、話を聞く、非常に自由で、教師なんだけれども、第三者的な立場でカウンセラーの仕事をなさっていた方がいらつしやたということで、それはいい制度が神奈川県にもあったんじゃないかと思えます。それがいつの間にか、全校配置になった途端に何か性格が変わってしまったということですね。それを今回文部省に逆取りされてしまったという感じがしまして、もし教師がカウンセラーをやるといふのであれば、昔の専任カウンセラーのような方がどんどんふえ、現在の臨床心理士のスクールカウンセラーの方とうまく協力して、やっていける体制ができれば、これはすばらしいことだということを補足しておきたいと思えます。

また何か質問とか、そういうことがございましたら、そのときにまたどうぞ。

○広瀬 どうもありがとうございます。

教育相談を通して感じたことをお話していただきました。先ほど木下さんがファジーな感覚ということをおっしゃいましたが、浅見さんの場合は、無理をしないようにしようというメッセージがあったと思います。

それからもう一つは、スクールカウンセラーに対するご自身のスタンス、ワン・オブ・ゼムということで、とりあえずやってみようじゃないかということをお話されました。

これで一応前半のシンポジストの人たちの発言は終わりにしたいと思います。これから約十分間の

休憩をとり、後半は三時四十分から開始したいと思います。

— 休 憩 —

○広瀬 今から後半の部分を開始したいと思います。

それでは、質問用紙の中から取り上げたいと思います。

「スクールカウンセラーの人がかわる時間はどのくらいなのか。それからどのくらいの人数の相談がありますか」という質問です。これについて中野さんの方から。

○中野 かかわる時間ということなんですけれども、週に二回で、大体一回当たり四時間程度なんです。私の行っていた学校では、昼休みと放課後の時間帯を大体三コマぐらいに分けて、大体一コマあたり四十分程度の時間になるんですけれども、それで予約をしてくる生徒さんに対しては、例えば水曜日の放課後の真ん中のコマを予約するとか、最後の三時五十分から四時半ぐらいまでの時間を予約するとかという形で、一つの相談には、大体四十分ぐらいの時間を割いていました。ケースによつては、長く何回も訪れるケースもありました。週に一回ぐらいのペースで、多かったのは八回から十回継続というのもありました。また、一回の相談である程度出口が見えて、それでもう来ないという場合もありました。

人数なんですけれども、平成八年度のスクールカウンセラーの利用状況のデータがあるんですが、平成八年度は、実質的に九月から行きましたので、二学期、三学期の合計で、延べにしまして生徒数二二七人、保護者十一人、教師五人の合計二四三名です。これは生徒なんかはグループで相談しに来る場合もありますので、これは相談件数の内訳にしますと、合計一―二件の相談があったということ



なっています。平成九年度、今年になりましても相談件数的には大体同じぐらい。多分今で、一応一学期からやっていますので、一二〇人ぐらいになっていると思いますが、あと来談した生徒の数は去年に比べてかなりふえています。と言いますのは、問題を抱えて相談に来るといふ来談以外に、サロンの目的で談話室に来る子どもたちが二年目は非常に増えたんです。特に昼休みにかなりの人数で談話室に来て、オセロゲームとか、将棋など中には用意してあるんですけども、そういうゲームを友だち同士でしたり、それから一緒に絵本を見たり、そういうくつろぎ方もしています。多いときは十五〜十六人一度に来たりしたこともあります。それほど広い部屋ではないので、ぎゅうぎゅう詰めなんですけど、何か居心地がいらしくて、教室でない場所で、ゆったりくつろげるという理由から、二年目(今年度)の利用数は非常にふえています。(三月までで、相談件数一三六、来談者延べ人数は三六九人でした)

○広瀬 中野さんについて、まだ幾つか質問があります。お話の中で、いわゆる悩みを聞いてあげると



に關しては責任を負うということも共に学んでいくと思います。

それから、子どもが評価される場というものが、できる限り小さくなっていったらいいんじゃないかなということをおもいます。高校入試では、一発勝負で失敗してしまって、望んでいる高校に行けなかったりということがないようにということ、できるだけ生活全般の中から、その子の良い面を評価しようというのが目的で、今の神奈川県高校入試選抜制度があるんだと思うんですけども、見ていると、それが裏目に出てしまっているなということをおもうんですね。ふだんのいい面を見ようということから、結果的に生徒たちは四六時中縛られている状態になってしまっている。本当の生徒会活動も、それから部活動なんかも、できれば評価に一切関係のない自由に楽しめる活動というふうになっていったら、子どもの服装のこともそうなんですけれども、自分を表現する手段というものを、人に迷惑をかけたり、人を傷つけたりというようなことでない限り、最大限に自由に表現できる選択肢を持つことが、とても大事だと思えます。今、本当にいろんな場面で自己表現ができることが、少しでもガス抜きになると思いますが、そういういろんな場で自己表現ができることが、少しでもガス抜きになると思いません。

それから、これはすごく大きな話になってしまってますけれども、中学校での相対評価というのは、私は何の意味があるんだろうかとずっと思っていました、やっぱり到達度の評価で絶対評価は必要かもしれないけれども、相対評価である必要は全くないんじゃないかと。そういうことで、人と比べて人の上に立たないためとか、並べられるという、そういう窮屈感というものが、絶対評価、到達度の評価のみになっていったときに、随分薄らぐのではないかとということをおもいます。以上です。

○広瀬 中野さんに関してはまだ幾つか質問がありますが、まだ他にもいろいろ質問があるので、今度はほかのシンポジストの方に答えていただきたいと思えます。

次に木下さんへの質問です。まず「カウンセラーの守秘義務はどこまであるのですか。例えば担任にどこまで話ができるのですか」という質問がありますが、それについてお願いします。

○木下 これも私自身も非常に難しいなど日ごろ思っている問題なんですけれども、当然、学校からの依頼で相談を受けますので、担任の先生に何も申し上げないということは、担任の先生自身が不安になられますし、相談してどうだったのかということとは、やっぱりお聞きになりたいのが本心だと思います。

臨床心理士は、守秘義務ということはかなり厳しく言われる立場にはあるんですけども、ただ、内容によってはどうしても学校にお伝えしなきゃいけないということも当然これは、学校というのは集団生活活ですので、必要な場合もあるんじゃないかと私は個人的には思っています。

例えば、極端な例で言えば、「学校は気に入らん。あした火をつけて燃やしてやる」と言ったとか、実際に実行するかどうかわかりませんが、そんなことや、あるいは「死にたい」と、「いついつ死ぬん





だ」というふうに語っている場合に、親御さん、あるいは担任の先生に一切そういうことをお知らせしないのがいいかどうかと、そういう極端な例ですね。やはりこれは命の問題であったり、また、学校という公共の施設を破壊しようというときに、そういう思いがあったことをカウンセラーだけの心の中にとどめておいていいのかというのは、私自身やっぱり疑問に思います。

それから、そういった場合ではなくて、例えば学校に対するいろんな不満とか担任の先生に対して思っていることとか、そういうことについて子どもが語った場合に、それをすべて担任の先生に、「この子はこういうふうに先生のことを言いましたよ」と、全部漏らさず語るといことはいたしません。ただし、むしろそのことを担任の先生に伝えた方が、「君と担任の先生の関係は改善されるんだよ」ということがわかっている場合には、その子に直接そういうふうに働きかけてみます。「言ってみるのはどうだろう」ということで話し合いをする中で、「じゃ、自分で言ってみる」とか、あるいは「じゃ、木下さん、言つてよ」という具合に。大体「自分で言いなさい」と言うんですけれども、「どうしても言えないから伝えておいて」という場合に、担任の先生にお伝えするといことはよくあります。今回、私は、不登校のケースの話を出しましたが、これは少し内容を変えてありますが、かなりの部分実際の話なわけですね。こういうケースを出すときにも、私たちは非常に神経を使うんですが、今回の場合、これはお母さんと面接しているものですから、お母さんに「こういった趣旨でシンポジウムでお話をしていいかどうか」ということを聞きました。そしたら「大いにそれは話してほしい。自分の子どものことが何かの参考になるんであったら、どうぞ使ってほしい」という、そういうお返事をいただいてまいりました。

ちよつと答えになったかどうかわかりませんが、そういうところですよ。

○ 広瀬 木下さんには、もう一つあります。

お話の中で、いわゆる子どもも親も、そして教師もオール・オア・ナッシングではなくて、もう少しファジーな考え方が必要ではないかといった主旨の話をなされたわけですが、その際ナイフで刺された先生の例を出しながら、「あの先生がもう少しファジーな…」ということをおっしゃったことについて、質問がきています。

「ファジーに生徒を理解した方がよいということですが、悪いことは悪いと言わないと生徒はいいと思ってしまうことがある。どうしたらよいですか」。もう一つ「ナイフ殺人の先生に関して、ファジーな対応があればというのは、時と場合により、相手によりなどと考えると、それは学校の今の指導体制という中では無理なのではないか。あの先生は、今の学校という中では立派な先生であると言えるのではないか。どうでしょうか」というような質問がきています。

○木下 そのことは、ご質問、あるいはご批判が出ると思っていました。「ファジーな」という言葉を使っちゃたので、ちょっと印象的だったかと思えますけれども、理解と対応というのは別だと私は思っています。

ナイフ事件の先生は、確かに立派な先生であったということは、私も否定はいたしません。熱心な先生だったというふうに思います。ファジーにというふうに言いましたのは、子どもの状態をどう理解するかというときに、つい大人は、めんどうなわけではないんですけれども、大ざっぱな理解をしてしまうことが多くて、子どもを細かく見ていくことができないときがあると思うんです。

ナイフ事件は、先生が子どもをどういうふうに見ていらして、ああいうふうになったかというのはわからないところではありますけれども、先生が一度子どもにも教室の中で注意をされたというふうに聞いていますので、そのときにその生徒がどういう反応をしたのかとか、先生の言ったことがどれぐらい理解できているかとか、そういうことをもう少し余裕を持って見ていく目があったら、あそこま

で追い詰めていくことにはならなかったんではないかなという気がします。

ご批判の中で、先生方がばらばらな対応をしますと統率がとれないとか、そういうこともあると思うんですけども、対応は確かに一貫性があると言いますか、先生方が、同じ対応をなさることは必要なのだと思います。思い思いにそれぞればらばらにやっていくことが、私の申しましたファジーな理解とは違うところをわかっていただけたらと思います。対応と理解はまた別であるということでしょうか。

○広瀬 不十分なところは、また後で質問していただきたいと思います。

あと、中野さんと木下さんに共通することと思われませんが、「生徒は、カウンセラーのところに本当に自発的に行けるのだろうか」というような質問が来ています。中野さん、どうですか。

○中野 本来に自発的に行けるんだろうかというのは、どういう疑問なのかと思っただけです。

○広瀬 例えば養護の先生と比べてつながりが余り強くないと思われるので、「教師からの働きかけでや」と相談に行けるというのが本当のところではないか」ということです。

○中野 先生に勧められてという相談者もいましたけれども、数的に言って、本当に自発的に来ている子たちの方が多かったです。

これはどのように予約を取ったり、また相談に来るかということで、幾つか方法を決めていたんですけども、私が談話室にいるときに直接来て、いつ話をしたいというふうに予約をしていくとか、それから学校の代表電話とは別に専用回線で談話室に電話を引いていただけですね。その特別な電話番号がありますので、自宅から電話をかけてきて相談をするというケースもありました。それから電話で予約を取るという場合もありました。あと担任の先生を通して予約をすることもできる。そういうふうに幾つか選択肢があったんですけども、相談に来た子たちの大半、八割以上は直接談話

室の方に来て、「相談したいんですけど」というふうには、先生から勧められてとかというのは一割ぐらいでしたから、本当に自発的にそれは来ていたんだと思います。

○広瀬 それから中野さん、木下さん、これも共通になると思うんですけど、「例えば親の相談ではどんなケースがあるんでしょうか」というような質問が寄せられています。

○木下 親の相談というのは、子育てに関することの相談ととらえた方がいいのか、あるいは親自身の相談というふうにとらえた方がいいのか、ちょっと私もわからないんですけど、相談を始めていますと、最初は、もちろんお子さんのことで相談に来ていらつしやる場合がほとんどですので、子どもにどうしたらいいか、子どもをどういうふうに理解したらいいのかということが中心なんですけれども、次第に話がお母さん自身のことへ発展することが結構あります。そういう話を聞いていますと、お母さん自身が自分の親子関係で随分悩んできたんだとか、傷ついてきたんだと。今現在も自分の親子関係の問題を引きずっている。まだ未消化な問題があるんだということが話しているうちにわかってくることはよくございます。

これは私が直接受けているケースではありませんが、よく子どもの虐待をするお母さんは、お母さん自身がかつて自分が子どものころに、やはり同じような虐待を受けていたことが間々あるというふうな言われますので、そういう子どもだけじゃない、お母さん自身が悩んでいるというケースはかなり多いと思います。

○広瀬 中野さんの場合はどうですか。

○中野 私のところは、かなり深刻な問題を持った保護者の相談しかなかったというか、保護者からの相談がそれほど多くなかったんですね。相談があったのは、一つは不登校になりかかっている、だんだん学校に行かなくなってきたり、遅刻がちになっている、そういうときに子どもにどう接した



らしいんだらうかと、そういうご相談とか、それから子どもの友だち関係が非常に難しいと。特に最近ではマンションなんかが多いですから、同じマンションの中で友だちが数人いて、その友だちの中で関係がまぎくなっちゃったというのは、単に隣近所の子たちというよりも、同じマンションの中というところ、より問題が深刻で、何か関係がやっぱりちよつと違うんですね。お子さんの人間関係の問題を、お母さん自身も非常に重たい問題として抱えていたというケースもありました。

それから一つは、家庭内暴力の相談もありました。学校では特に問題のない、本当に目立たないお子さんだったようですけれども、おうちで母親に対して暴力をふるっていたということで、そのお母様には何回か継続で相談を受けたりいたしました。

○広瀬 ありがとうございます。

次の質問は、今までとはちよつと違って、もう少しスクールカウンセラーの制度のあり方、あるいは導入のあり方、あるいはスクールカウンセラーそのものをどうとらえるかという、かなり根本的な問題

に関する質問が幾つか出ています。きょうのテーマは子どもの再発見ということで、今の子どもをどうとらえるかというのが中心テーマですが、やはりスクールカウンセラーの方をお迎えしているというところで、スクールカウンセラーについての根本的な疑問が幾つか出ています。

例えば「力石先生の事例の中で」というふうなタイトルが出ています。これは恐らく力石先生に直接答えていただくというよりも、全員の方々に、こういう問題をどう考えるかといったように持って行った方がよいと思います。

「子どもとの短い時間、あるいは面接の分析の中で即座に適切なアドバイスを得た、それってちょっとひっかかります。子どもとの短い触れ合いの中でそんな分析ってできるのでしょうか。ある事例、パターンの中にその子を当てはめて対処してしまうおそれはないでしょうか。子どもとの長い触れ合いの中で、初めてその子が見え、その子がかわってくるんじゃないでしょうか。私がカウンセラーのアドバイスというものに不安をかんじているのはそこなのですが」というようなことが書かれています。まず力石先生どうですか。

○力石 今のご意見の中に少し感覚として感じるのは、私たちが日ごろ悩んだり、それから差し迫って取り組んでいる生徒指導の分野の内容が入っているのではないかなというふうに感じます。

うちの学校は研究校として、学校組織の中で生徒指導部、研究部、保健部とか、そういうものがどの学校にもあると思うんですけど、生徒指導部ではなくて、研究部の中に入っています。したがって、私の感覚も日ごろ接していなければわからない生徒指導を背景とした、その子への接し方でカウンセラーの先生の恩恵を受けているわけではなくて、むしろはっきりと言えば、精神科医、精神科、こういうものの流れ、分野として、私は今最初に発表したときに「頼りにしている」と言ったのは、そういう面だと自分では思っています。

ですから、例えば外部の者が入ってきて、本当に生徒指導について間違った方向にいかないだろうかとか、わかるのだろうかという意見があるというふうに読んだことがありますけれども、私は、日ごろの心の悩み、それから心の抱える問題、こういうものについて専門的な人が身近にいるというのは大変心強い。こんな意味で申し上げたいと思うんです。生徒指導部に、うちのカウンセラーを受け入れる組織が入っていないということは、つまりはそういうことだと思っんです。

で、私が4月から7月までかけて何度も家庭訪問をしたり、おうちの方においでいただいたり、子どもも交えて、「どうして学校へ来れないんだろうね」って背景を探って行って、これが原因になるんだろうなということとはわかりましたが、本当に一時間にも満たない中でその流れをお話する内に、「この子がこうなったのはこういうことでしょうね」というふうにとらえていただいたのが、三ヶ月かけて私がかつとたどり着いたこととほぼ同じだったんです。だから、そういう意味での分析力や、私たちへのアドバイス、こんなものはやはり必要だと思っんです。

○広瀬 ケース・バイ・ケースだと思っんですが、短い時間で適切なアドバイスをスクールカウンセラーが行うことができたということに対して、浅見さんはどう思っられますか。

○浅見 今ちようど言おうと思っっていたので、振っていただいとでもありがたいんですけれども、一点、今力石さんがおっしゃった中で、お医者さんとかいうふうには、たとえとしておっしゃったと思うんですけれども、決して相談に来た子は病人じゃないし、例えば不登校だとか抱えている子は病人じゃないし、それを治すという、治療するという意識でスクールカウンセラーは入ってきたんではないと私は信じたと思っんです。だから、私のスタンスで言わせてもらえば、違った目を持った人で、いわゆる心のことを臨床でいろいろやられてきた専門家、それを医者と言っんだと言われればそうかもしれないけれども、私は、不登校だとか、いじめの問題というのは、教育課題であるかもしれない

けれども、教育病理ではないと思っっているんです。

○力石 すみません。足りないところをはつきりと言っていたら、「あっ、よかったな」と思っただけですけれども、心の整理をする、心の悩みを出すという意味において、私は本当にたとえて申し上げたんですけれども、だから、生徒指導に外部の者がかわってくるということではないということ、実際に研究校に所属する職員として感じたんですね。以上です。

○広瀬 力石先生の場合には、的確なアドバイスをカウンセラーの方からいただいたということが実際にあったわけですが、カウンセリングを実際に行っている中野さん、あるいは木下さんの場合、こういう短い時間の観察で、その子の全体像を理解するといったことは果して可能なかどうか。ご自身の体験からこの点について何かあれば、お願いします。

○中野 先生と連携して一つのケースに取り組んでいく場合には、それこそまさに連携であってチームワークなんです。決して私の何か名人芸のようなもので、「お答えいたします」みたいな感じで分析をするのではなくて、やはり先生が時間をかけて見てこられた様子を伝えてもらって、それをもとに私は自分の背景である専門的な立場から思いつく、役に立ちそうなことをヒントとして投げかける。その私の投げかけたヒントを、先生が「あっ、これはそうかもしれない」と思われたものを実行されると、それがうまくいったり、またいかなかったり、その結果を聞いて、「じゃ、今度はこうしてみよう」というふうに、結局、先生と私とで、その子にとって何が一番よいかということの対策会議をしている。そういう感じなんです。

ですから、私が先生からそういう話を伺ったり、また、その生徒さんと接する時間は確かに短いわけですが、そこに何と言いますか、例えば不登校のケースですと、どうしても学校の先生は、何とか学校にこられないかということをしごく考えます。やはり職業柄そうだと思いますし、



やっぱり先生が「あんまり学校に来なくてもいいよ」ということを余り公言されちゃうのも、私もどうかなと思うんですけども、でも、そこに臨床心理士としての私は、学校に来る、来ないを飛び越えて、その子の人間的な成長という、そういう広い視野から見るときに、今この子はどういう過ごし方をしたらいいかと、そういう視点で、こんなことも考えられるということ提案する。そうすると、立場が違うので気づくことが違ったり、それからそういう対策会議の中で、今までそれぞれ気づかなかったことに気づいたりという、そういう相乗効果で、一人で考えているよりも、その生徒さんのことがよりよく理解できていくという、そういうことがあると思います。

○木下 子どもとの短い面談で判断を下してしまうことへの危険性を感じるといようなお話だったと思うんですけども、それはまさにそのとおりだと思います。じゃ、力石先生の学校のカウンセラーの方が、どうして一回の話で何か、「それはこうしたらいいですよ」ということをおっしゃったのかあって私なりにいろいろ考えてみますと、我々はそういういろんな不応のケースをたくさん見ておりますので、ある程度、例えば先ほどの完全癖の子でしたら、それに近いようなケースが幾つもあるんですね。そうすると、「あつ、これに近いな」という、悪い意味ではパターンなんですけれども、そういうものを幾つか蓄積しております。ただし、一人一人の子どもはそれぞれ違いますので、似ているようであっても、必ずどこか違っております。そのところを我々がきめ細かく理解していくことは非常に大切だと思うんです。

ただ、そういうパターンだとか、過去にそういうケースがあったとか、そういうものを全然持たない子どもを理解していくよりも、理解がより早くなる、そういう利点は確かにありかなと思うんです。ですので、力石先生の学校のカウンセラーの方も、それに近いケースを幾つも見ているらして、ある程度「こういうことではないでしょうか」という推測されたのかなと思います。ただ、カウンセラーは、

「私はこんなふうに思います」と言ってみますが、それを何が何でも先生にやっつけてくださいという強い姿勢は持つておりませんので、「私はこう思いますが、先生はどうお考えになりますか」ということで、必ずそこですり合わせをします。先生が「それだったらできるかもしれない」とか、「私もそう思うので、じゃ、それはやってみようかな」とおっしゃったことしか現実にはやっていきませんので、カウンセラー主導で子どもに対応していくことにはならないと思います。

○広瀬 ありがとうございます。力石さんの方で、何かありますか。

○力石 今隣の先生がおっしゃった最後の部分ですけど、私の話の中では省きましたけれども、本当にそのとおりで、「どう思いますか、私はこう思います」というような伝え方での話が数多くあります。

○広瀬 どうもありがとうございます。

次の質問は、根本的な問題にまたかかわると思います。カウンセラーの導入よりも学校のシステムそのものを変えるべきではないかというような質問がたくさんあります。

「子どもの再発見とは、子どもとの関係性を組み直していくということでもあるだろうが、それがスクールカウンセラーによって先取りされたり、ガス抜きされたりして全体化していかず、今の学校の枠をより固定化させている面をどう考えているか」という質問です。

それから、同じような質問が出ています。「中野さん、木下さんのカウンセラーとして働く姿勢に感銘を受けました。(中略)カウンセラーもパーソナリティー次第だなと感じました」、確かにそうでしょうね。これは教師にも言えると思いますけど(笑)。「しかし、カウンセラーの多くの方々がロジャーズの来談者中心主義に立つことや、カウンセラーの中心性という原則に立つと、相談に来た人の心の持ちように着せられたり、心の触れ合いも退けられることが多いのではないかと危惧します。学校の教員は悩む子がいることはつらいことなのですが、即座に道を示してくれるカウンセラーの助言ではな

く、迷いながらも子どもの様子をしっかりと見て対応し、自ら問うことではないでしょうか。カウンセラーはシステムやモラルを含めて、やはり自らを問うことではないでしょうか」というような内容です。つまり、学校のあり方、システムそれ自体を変えていく必要があるのではないかとという質問です。

カウンセラーの今日の発言の中では、いわゆる単なるカウンセラー的なことでは解決できない。根本的な解決が必要なんだということが言われていますが、これについて何かご意見があればお願いいたします。

○浅見 任せられるほどの力はないんですけども、先ほどスクールカウンセラーの方がおっしゃっていったように、スクールカウンセラーが学校に入って、「こうせい、ああせい」ということは全然ないわけですよ。私も「教文研だより」に書かせていただきましたけれども、書くに当たって、スクールカウンセラーを選んで送り出す神奈川の臨床心理士会の、コーディネーターの方に取材をしたんですが、その方も「スクールカウンセラーはとにかく黒子なんだ」



と繰り返しておっしゃっていました。私は、「こんなことをしてイニシアチブをとるんじゃないですか」と何度も聞いたんですけども、そのたびに「いえ、我々は黒子です。」とおっしゃっていました。教育は心の問題だけ取り出して、「心の教育」をすれば、それでいいんだという問題じゃあない。教育というのはもつと全方位的なものなのです。だから、「教育と現場の肩がわりなんかとてもできません」とはつきりおっしゃっていました。

その言葉があらわしているように、一緒に現場の先生方と考えていく。その中で学校のシステムも変わっていかばいいし、その一つのきっかけになれば、それだけで大成功じゃないか、今回のスクールカウンセラーの導入については思っているんです。

カウンセリングの仕方についても、ロジャーズであるとか、その前のウィリアムソンであるとか、歴史的にはいろいろあるんでしょうが、スクールカウンセラーはそれらを日々勉強しながら、臨床体験を重ねる中で目の前にいる子どもをどうするかと一生懸命考えてやっていたらと思うんですよ。また、そういう勉強をしていただかないと、スクールカウンセラーは成り立たないと思うんです。そういったことを当然やっていると仮定しての話ですけども、お互いに切磋琢磨しながら今ある学校のシステムを変えていければいいんじゃないかと思いません。

個人的には学区内の地域に出かけていかれて、地域全体のカウンセリングも一緒にやっていただければ、それこそ「地域の教育力」を高める一助になるんじゃないかというふうに積極的にとらえられませんか。そこは、これからの課題として私も考えていきたいと思っています。

○広瀬 ありがとうございます。

一人ずつ答えてもらおうと思いましたが、時間が少なくなりましたので以上で質問用紙に対する質疑応答を終わります。

次にフロアーの方からのご意見、ご質問をお願いします。

○質問（女性） 浅見先生のお話でしたら、スクールカウンセラーは、あくまで学校の外部の目という形の役割を果たす方がよろしいんじゃないかというふうには、私はとらえたんですけども、中野さんのお話を聞いていますと、学校の中のシステムを変えろという意味では、多分スクールカウンセラーは職員会議には入っていないと思うんですけども、中野さんのようなご意見を学校の中で具体的に反映するとしたら、どこに求めたらいいのでしょうか。直接文部省にというわけにもいかないでしょうが、私、中野さんの意見に大変感動して聞いておりました、中野さんをぜひ文部大臣にしたいと思いましたが、まさかそういうわけにもいきませんでしょうか、学校の中で、システムの矛盾とかを指摘する場所はないのだろうか、または、あつてはいいけないのだろうか、という点についてお尋ねしたいと思います。

○広瀬 これは浅見さんへの質問ですね。

○浅見 私はそういう場をぜひ学校の内部につくっていただきたいと思えます。具体的には中野さん達の方がお詳しいと思いますが、私が取材した中では、スクールカウンセラーを導入されたところは、校内にきちんと組織もできているんですよ。でも実際にそれが機能しているかと言うと不確かな部分があるんです。ですから、そこがうまく機能していけば、直接、先程のプライベートの話にもつながると思うんです。つまり、何を言っているのか、どういう事まで担任に教えるべきかといったこと、現場の内部の先生方との連携や、信頼関係ができていけば、子どもがスクールカウンセラーに言っている内容を別に先生に言う必要もないし、担任が心配して、スクールカウンセラーに「どんなことを言っていましたか」と言うこともないのではと思います。

でも、それが理想的な連携のあり方だと思えます、恐らくスクールカウンセラーとして派遣されて

いる方の多くがそういった現場での連携を取る上で、養護の先生あるいは相談担当の先生とどうやっていくかということに、一番苦心されていると思うんです。そこがうまくできれば、現場が変わっていくんじゃないかと私は期待しているんです。

○広瀬 質問された方、納得されましたか、よろしいですか。それでは、後ろの方、お願いします。  
○質問(男性) お問い合わせします。スクールカウンセラーというお仕事が今の学校現場においては大変大事で、かつ難しい問題だなということを感じておりますが、その全貌というのが私はまだよくわからないので、これから勉強していきたいと思えます。

特に今日お話されているテーマである、子どもたちをどういうふうにも再発見するかということで、実際子どもに話をされるときに、この中学生がどういう状況で今問題を起しているのかということ、分析されると思うんですよね。そのときに最初に、中野さんがおっしゃられましたけれども、中学生のつぶやきは、非常に恐ろしいというか、あるいはニヒルになっているというか、「誰に殺されても未練がないなあ」というような心境になっているという事は、非常にさみしい中学生になっているんじゃないかなと思うわけです。そのことを指して、中野さんは「透明な存在」というふうに規定されたと思うんですけれども、この「透明な存在」というのは、神戸事件の犯行声明にあつたものと同じだというふうに言われましたけれども、そこで私はちょっと思ったんですけれども、神戸事件で犯行声明に出てきているような、「透明な存在」という中学生の言い方と、この前黒磯の中学で起きたような中学生のナイフ事件とはちょっとその質というか、性格が違うんじゃないかなと思つたので、どういうふうにも中学生を分析しているかを、もう少し教えていただけたらなと思つたんです。

そこに関連して、きょうの感想文の中に出てくるんですけれども、「心の教育についてどう思いますか」と出ているんですね。きょうは「心の教育」についてということでは余り具体的に話されていな

いんですけれども、この「心の教育」というのはいろんなことが言われていますね。この前、施政方針で首相が「心の教育をやつていかなきゃいけない」というふうに言っていますけれども、そういうようなものと同じことなのかどうなのか。ちよつとその辺、きょうの話題で話されるかなと思いますけれども、なかつたので、質問したいと思います。よろしくお願いします。

○広瀬 特に中野さんというふうに限らず一人一人でよろしいですか。神戸の事件と黒磯の事件、中学生が起こしたわけですが、同じ中学生といつてもやはり質が違うのではないかということについてシンポジストの方々にお願いします。



○質問（男性） 同じ中学生が起こした事件というふうには私は言っていないません。神戸の事件で言われている「透明な存在」という、そういう言い方というものはちよつと違うんじゃないかと。確かに神戸の事件は中学生が犯人だというふうには報道されていますけれども、私はそういうふうには受け取っていません。だって、神戸の家庭裁判所で、あれは警察官に自白の強要をされたものであるというふうに出されて、あるいは違法であるから証拠から排除するとまで言われているわけです。確かに犯人扱いにして報道されているけれども、そういうふうには簡単に中学生が犯人というふうには言うことはできないんじゃないかなというのがあるんですよ。だから、私の質問は、そういう同じ中学生だからという意味じゃないんです。

○広瀬 私が言った、同じ中学生というのは、形式的な意味での中学生ということですよ。

○質問（男性） 「透明な存在」というふうには分析するんですけれども、それはどういうことなのでしようかと、そのことを具体的に語っていただければ結構です。

○広瀬 それでは、中野さんをお願いします。

○中野 「透明な存在」ということについて、もっと具体的にと言われても、先ほどお話したことぐらいいなくなってしまふんですけれども、本当に神戸の事件に関しても、そのことについてだけ語ることは、この場では余りできないと思います。本当の情報も限られていますし、報道されたことが正しかったのかということもわからないので、ただ、犯行声明文の中に「透明な存在」という表現があったことは事実であり、その言葉でイメージしていた中学生の雰囲気、実際に私の目の前に相談に来た子どものつぶやきにも重なって、私には見えたということですね。

今の子どもたちはやっぱり、出るくいにならないようにみたいところがあるんですね。これは小学生からの、もっと言えば、幼稚園からの教育の影響もあるかと思うんですが、みんなおとなしく自分の席に座って授業を聞くことがよしとされる。週に五日から六日学校に行って、毎日八時半から二時過ぎまでそういうふうにして過ごしていることの繰り返し、そうなることの影響ってかなりあると思うんです。そういう学校での授業のやり方、それ一つは何かそんなに大きな害悪とは思えませんが、それが日常繰り返し返されることによつて、本当に目立たずいることがいいというふうに子どもたちの頭の中にすり込まれている部分というのがあって、ではないかと思っています。

そう思われている部分と、それから実際に意識して、目立つことをするといじめられてしまふ、つまりいじめのターゲットになってしまふという、そういう恐怖も持っていると思うんです。

それからもう一つは、家族からもそうなんですが、「よく子どもたちの個性を尊重する教育」というようなことが言われるんですけれども、それはいいところを見つけて伸ばすということではなくて、いいところを見つけて伸ばすんだったら、じゃ、何にも取り柄のない子はどうするんだと思っちゃうんです。何か取り柄がなきゃ人は価値がないのかと思ったら、全然そうじゃないと思います。



だから、どうしても親も、学校でかかわっている大人なども、いいところ、何がよくできるかという目で子どもを見てしまうとところがあつて、そういう能力を基準に見てしまうので、その子のありのままの姿を何か受けとめているというか、そのありのままの姿とぶつかっているというか、そういう実感が子どもの日常の中に、家庭でも、学校でも余りないのではないか。それがその「透明な存在」につながっていると思うんですね。だから、「私は何者か」というのを子どもたちが、「私は算数がよくできる」とか、「水泳が得意だ」とか、そういう何が得意ということ以外に、「私は家族からすごく愛されている」といったことを語れる子であれば、きつと自分が「透明な存在」だとは決して思わないだろう。でも、とてもさみしいことですが、そういうふうに取り柄といった一部分じゃなくて、自分がまるごと受け入れられているという実感を持ってないでいる姿が、何か「透明な存在」なんじゃないかと、私のイメージではそんなふうにとらえています。

○広瀬 ついでにもう一つ、「心の教育」について、中野さん何かお考えがありましたら…。

○中野 作家の村上龍さんが、「AERA」の特別号の中で書いていらつした文章の中に、「心の教育、心の教育と言うけれども、心の教育が一番必要なのは文部省の官僚だ」と書いていたんですね。私、それを読んで、ああ、すごくそうだなと思いました。それはもう文部省の官僚に限らず、「心の教育」が必要なのはやっぱり大人だと思えます。大人が自分の生き方を見直し、子どもに対する向き合い方を見直していったときに、子どもには自然にそれが伝わるんだと思います。だから、変な「心の教育」のためのカリキュラムをつくるのか、そういうことでは全然ないと思います。

○広瀬 大人の生き方が問われるという発言は、木下さんもしていました。ほかの人にも答えていたいただきたいんですが、別の質問を受けたいと思います。



○質問（男性） 今いろんな話をずっと聞いていまして、すごく変だなと思った

ことがあります。それは、例えば私も教員ですけれども、今、基本的にはスクールカウンセラーだろうと、ドクターだろうと、子どもに必要で手助けになることであるならば、大いに入ってもらいたいと思っています。それで今学校についてわからない人がポツと入ってきて、児童指導とか、生徒指導ができるのでしょうか。だけど、今の現状を見てみると、学校教育の中でいじめといった、問題が出ているのは、社会的な影響もかなりあるけれども、学校そのものの生徒指導とか、児童指導が機能していないということだと思えます。そういうところにスクールカウンセラーだとか、ドクターが週二回ぐらいポツと来て子どもの教育をどうしていこうかというのはどうだろうか、ちょっと我々教員の傲慢さじゃないかなと思えます。

今の世の中を見してみると、例えばドクターでも、インフォームド・コンセントを入れていこうとか、いろんな社会で違った面を積極的に入れていこうよという部分がありますよね。大蔵省だつて変えていこうとか、金融業界なんかも変えていこう。証券業界なんかでも変えていこう。そうした中で一番変わっていないのは教員の世界じゃないか。我々はいろいろ言っているけれども、やっぱり一番他人の目を気にしちゃっている。入ってくると、いろいろ理屈をつけてしまう。そこを直さないと、ちょっと子どもの問題って語れないんじゃないかなと思います。

○広瀬 特に質問ということではありませんね。では、後ろの方、お願いします。



○質問（男性） 今の方の発言を聞いて思ったんですけども、例えば学校にスクールカウンセラーが登場することに対して、ある一定の危機感を持つ人間達って、僕ももちろんそうなんですけれども、先程の質問で読み上げてもらった者なんですけど、他人の目を気にするからとか、そういう次元の問題ではなくて、例えばきょう僕が聞いていて、違和感を覚えたのは、物事って何でもそうだけれども、いい面がありや、問題点、悪い点だっていっぱいあるわけです。そうすると、スクールカウンセリングにおける問題点とか、限界性といった、否定すべきような点だってあるんじゃないか、本当はそういう部分ももつとあからさまにやっついていかないと、シンポジウムの深まりとしては弱いんじゃないかなという気がするわけです。

ついでに言いますと、このテーマからちょっとずれるかもしれませんが、この間の「教文研だより」なんかもしつくり読ませてもらったわけではないんですけども、見方として言えば、とりあえずスクールカウンセリングでやっついていくぞという同じような視点から書かれているように感じました。もつと否定的な視点なんかいろいろ含めていく中で、全体の論議が深まっていくはずだから、例えば今回は第十一回ですけれども、次回にこういうのがどうつながるかかわかりませんが、そういう視点ももうちょっと絡ませていく形で話を進めていった方が、もつとおもしろくなるんじゃないかなと感じます。

○広瀬 どうもありがとうございます。今のは意見ということでもよろしいですか。ほかにありませんか。



○質問(女性) 実は私、今の方のご意見は意見としてではなくて、質問として答えていただきたいというふうに思っています。

私は、実は教育関係者じゃございませんで実は市議員なんです。日教組の大会でデメリットの部分がどういふふうの評価されたのかはわかりませんが、本当にスクールカウンセラーを全学校に配置して、当面、今の子どもたちの苦しみを若干でも救えるなら、そういうものを利用する、支援策をつくるということは大切だと思っっているんです。でも、いかにせん専門家じゃありませんので、そのデメリット、ないしはやり方によってはこんなデメリットが出てきますというところを具体的に教えていただきたいと思っ

て、この会に参加させていただきましたので、できましたら教えていただきたいと思っ  
○広瀬 それは全員の方々に聞くという形でよろしいですか。それでは浅見さんの方から、スクールカウンセラーの問題点や、デメリットについてお話していただきたいと思っ

○浅見 先ほどの前の方のご意見からもつながりますけれども、「教文研だより」を執筆した者として弁解も兼ねて言いますけれども、最後に問題点を幾つか挙げておきました。まず一点目は、中野さんがおっしゃったような勤務条件で、果してカウンセリングとして有効なのかどうかという点、これも議論しなくてははいけないと思っます。二点目として、カウンセラーの資格、養成についてどうかというこ。これは今までと同じでいいのかと言うこと。それから三点目が、カウンセラーの勤務校の配置というのが、神奈川県内で言いますと、三十四名臨床心理士が派遣されておりまして、三十二校配置になっています。川崎が市の単独事業でやっていますので、二名多くなっています。でも、それだけではないと思っますけれども、絶対数がとにかく足りていないんじゃないかということ。だから、異動したらその後はいなくなっちゃって、相談室にまた鍵がかけられてしまう、それでいいのか

という問題。それから四点目は、養護教諭との関係ですけれども、これは先程ご質問に答える形で、連携が一番だという話をしましたけれども、そことの関係がうまくいっていないところもあるということは聞いたことがあります。

それから、根本的な問題ですけれども、これは前に言いましたけれども、教育課題に対して行政が無責任である。今までやってきた政策の失敗を押しつけるような、あるいはガス抜きという話を誰かから聞きましたけれども、このガス抜きみたいな形でスクールカウンセラーを導入するんじゃないかというふうなことについての危惧、あるいはそれに対して、根本的な現場の問題として考えていく姿勢が必要ということです。それから教育課題を細分化していくこと。要するに体が悪かったらお医者さん、校医に行きなさい。心の問題だったらカウンセラーに行きなさいみたいな、そういうように細分化することは果していいのかどうか。そういう見方であつたら、これはやめた方がいいと思います。教育というのは全人的なものだから、「心の教育」だけ取り出してなんていうのは無理だという話をしましたけれども、つまりそういうことなんです。

それから、私は、これは問題点であり、お願いともなると思うんですが、先ほどちらつと一九六〇年代に、専任カウンセラーというのは、学校の先生の研究会からほうふつと起こって、そうした学校の先生、現場の先生がカウンセラーになっていくという動きが非常に強くあつて、全県でそういう動きがあつたという話をご紹介しましたけれども、なぜ今そういうようなことが学校の現場からほうふつとして起こらないのか。当時は校内暴力とかが問題で、先生方が本当に困って、だからといって、学校行政から強圧、強権的な態度で生徒を迎え込もうという動きじゃなくて、現場の先生から、カウンセリングということを始めようじゃないかという動きで、専任カウンセラー制度というのはできたそうなんです。何で今それが現場から起こらないで、行政、文部省からスクールカウンセラー制度と

いうことで先取りされちゃうように、おいしいところだけを持っていかれちゃうのか、そういうことが導入されてしまったかというのが私は非常に残念で、これからぜひ現場の先生にやっていただきたいと思っています。

○広瀬 時間が迫ってきました。今の質問は非常に大切な質問だと思います。

力石先生から順番に、スクールカウンセラーの抱える問題点について、簡単に発言していただければと思います。

○力石 すみません。この話の流れの雰囲気に乗れていないことを言うかもしれませんが、お許しただきたいと思っています。

デメリットというわけではないと思いますが、一点は、研究校に配置されている時間としては非常に少ない。それからもし日本の全部の学校にこういう方々が配置されるとすならば、たまたま今うちの学校に来ていらっしゃる先生は、非常に能力的に高い方だと思っています。そして今日お二人のカウンセラーにもお会いしました。これで三人目なんですけれども、こういう方が全校に配置されるということはまずないと思います(笑)。質の問題が起こってくると思うんですね。だから、そういう意味で問題が生じるのかなというふうに思います。

○広瀬 それでは木下さん、お願いします。

○木下 カウンセラー制度の是非なんですけれども、先生のご質問のとおりで、実は私なんかが学校へ行っているのだからかという不安が常につきまとっているんですね。一体何ができるんだろうかって。それは自分の仕事に自信がないというよりも、私は臨床家として仕事をしていきたいという思いをずっと持っておりましてので、また、それを実現させる形で今まで来ておりましたけれど、学校のシステムとか、教育課題、それから学校の生徒指導と絡んだときに、果たしてカウンセラーが有効な



のかどうかというところは、私自身も疑問です。そういう不安がある中で入っていきたくておりますので、私自身もこれからどうなるのか、展望というものがほとんど見えない状態でおります。

先生方が抱えていらっしゃる不安だとか、疑問だとか、それと私たちの疑問というのは、質は違ってもどこか接点がやっぱりあるんじゃないかと思えます。これからこういう形のカウンセラーシステムがどこまで続くのかわかりませんが、そういうことを考えていくという点で、この事業は学校の教育に何か益をもたらすものであつて欲しいなというふうに期待をしております。

○ 広瀬 最後に中野さん、お願いします。

○ 中野 二年間スクールカウンセラーとして入つていまして、問題点として私に見えたことは、カウンセラーを受け入れると学校側の雑務が多くなるなどということですね。窓口になっておられたのは生担の先生なんですけれども、この生担の先生の負担というのはかなりのものだったろうと思います。いろいろなところと連絡会議などもありますし、また、書類

のようなものを定期的に出さなきゃいけないこともあり、ただでさえ本当に今学校の先生方は仕事で手いっぱいなのに、スクールカウンセラーを受け入れるということは、そのための事務がふえてしまうということで、そこをどう乗り切るか、そういう工夫は絶対に必要だと思えます。

私のやってきた感触では、一部の先生はスクールカウンセラーが入ったことを、とてもラッキーだと思って利用してくださっています。そういう方々はよく話しかけてくださったり、かかわっている生徒さんについてのコンサルテーションを求めていらしたりということでよくお話をしますが、半分以上の先生方は、研修会等でかわる以外は余り具体的なお話をしないんですね。ですから、恐らく半分以上の先生方にとっては、カウンセラーが入ったからといって、特別にいいことはなかったという感じかもしれないなと思っています。

ただ、その辺の率直なご感想を本当に知りたかったので、中原中学では先生と生徒に対して、スクールカウンセラーを受け入れてどうだったかというアンケートを行いました。この結果を私はまだ見ていないんですけれども、「中原中学校の二年間の実践報告」という形でまとめられて、もしご希望される方は、中原中学校にご連絡されれば、それを受け取ることができると思いますので、それを見ていただきたいと思っています。

もしスクールカウンセラーが来て、本当によかった、いろいろ相談しようというふうには積極的に活用される先生が、例えば二割ぐらいだったとしても、目に見えた害がないならば、やはりそれはいいことなんじゃないかなと、そういう感じを私は持っています。やはり子どもにとっても、保護者にとっても相談できる相手の選択肢が広がることは決して悪いことじゃないと思うんですね。私もやはり最初に中原中に入るときに先生方に言いましたのは、「心の問題のカウンセラーって、そういうことじゃないんです」ということを言いました。生徒さんによっては担任の先生が話しやすいとか、部活の



顧問の先生が話しやすいとか、あの先生に相談したいとか、それは当然あるだろうし、そういうのは先生が対応していかれるのが一番いいんで、「ただ、相談できる大人が子どもにとつて一人ふえるという、そういうことです」というふうにあいさつをしたんですけれども、選択肢がふえるというのは、子ども主体の面に立ったときにやっぱりいいことなんじゃないかなと思います。

○広瀬 どうもありがとうございます。

受け入れ側から見た問題点と、それからスクールカウンセラーご自身の目で見た問題点と若干違うかも知れません。やはりこれからお互いがその点についていろいろ突き合わせて考えていく必要があるのではないかと思います。地域によってまだスクールカウンセラーが入っていない学校もあるという事です。

今日はスクールカウンセラーの方たちをお呼びして、生の声と言いますか、考え方なり、パーソナリティーのようなものを皆さんの前で紹介できて、「あっ、スクールカウンセラーってこういうものなんだな」というイメージがつかめたのではないかと思います。

ただ、スクールカウンセラーといってもいろいろなパーソナリティーの人がいますから、すべてがこういう人たちだけではないということは、やはり肝に銘じておくべきだと思います。

時間が大変オーバーしてしまいましたが、とりあえずこれで今日のシンポジウムは終わりにさせていただきます。どうも長い間ありがとうございます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

教文研としましては、このスクールカウンセラーの扱いは非常に難しいと思っております。執筆してくださる方を探すことも、またシンポジストとして出ていただくこと自体も非常に難しいとい

う状況にあります。学校に対して、「反対」「賛成」それぞれあるかと思いますが、今日出された成果と課題、問題点を皆さんで共有しまして、これから第二、第三の話し合いへとつなげていきたいと思えます。

それでは、最後に閉会の言葉としまして、湘北教育文化研究所の専任所員をさせていただきます吉川さんにあいさつをお願いします。

## 閉会のあいさつ

○吉川 きょうはどうもご苦労さまでございます。



第十一回の教文研シンポジウムというところで、四人の先生、そして司会者と、大変会場は盛り上がった内容であったと思います。まだまだ解決をしなければならぬことは山ほどあると思います。特に今日の教育問題、「子どもを再発見する」という言葉の中に、子どもではなくて、大人たちがもうちょっと自分のことを考えなきゃ、そこから育っている子どもたちはどうなるんだらうと、そんなふうにも思うわけで

す。どうかこれからの教育について、さらに真剣に考えを持って、このような場に参加し、そしてよりよい教育の実現のためにこれからの協力をお願いしたいと思います。

きょうはいろいろとどうもありがとうございました。(拍手)

— 閉 会 —



## 第十一回 教文研究教育シンポジウム感想内容

実施日：一九九八年二月二十一日(土) 厚木シティープラザ5F

I・本日のシンポジウムの論議を聞かれていかがでしたか。

- ①大変参考になった……………十六名(六〇%)
- ②物足りなかった……………三名(一一%)
- ③少し疑問が残った……………六名(二二%)
- ④その他……………二名(七%)

・従来の自分の認識とほぼ同じであった。

・中野さんの「学校を変えるべきだ」という幾つかの提言をカウンセラーという学校関係者以外から聞いたことは貴重。議論を聞いていると、何故中野さんが、そう感じたのか、他の「まじめな」先生方に不安を感じてしまった。

II・様々な所で「子ども達が変わった」と指摘する声を耳にします。

1・貴方はこの点をどう思いますか。

- ①変わったと思う……………二十五名(八一%)

## ②変わってないと思う………六名（一九％）

## 2・貴方は、今の子どもの何が問題だと思いますか。

- 変わってない面が多い。子ども時代を生きている、大人とは違った存在で、昔と違ってないと思うが、違う僅かの面に問題が多い。
- 他との関係が希薄（友達、先生、兄弟、親）あるいは、作り方が下手。
- 話が出来ない、聞けない、他人を理解出来ない、しようとしれない。
- 変わったところもあるが、変わらないところも大切に見ていく必要がある。
- 世間が狭い。
- 直接体験が乏しい。その結果、「教育」に伴う抑圧にも耐えたり、適応したりすることが出来ない。
- “悪”を受け入れることがなく育っていることかなと思う。
- 生活の中の体験（特に乳幼児）が少ない。
- 大人が問題だ。
- バーチャルな世界が大きくなり、子どもの社会性や対人関係が十分に身に付かないまま小学生となり、キレル状況でのナイフ事件のようなものを起こしているのではないか。
- ポケモン事件に象徴されるように我々の無自覚なうちに、子どもの心や体が資本の市場とされて、無意識の内に侵されているのではないか。
- 我慢する気持ちが少ない子が増えたと思います。保護者に問題を感じる。
- 子どもだけでなく、親の価値観が多様化してしまい、こちらの話が全く理解されないことも多くなつた。

- 子ども同士の関わり（遊び、喧嘩）も淡泊になっている。
- 自分の世界に入り込んでいて、外に出す手段が分からない。寂しい気持ち、辛い気持ちを誰にも表現できない。他人に対して無関心。自分にも無関心。
- 考えて行動する時間を与えられなかったこと。

### Ⅲ・貴方は「心の教育」ということについて、どう思いますか。

- 直接、集団で「心の教育」が可能だとは思わない。一人ひとりの「心」はその生い立ちにより違う。それを「教育」するのは、日本の現在の学校教育制度の中では不可能だと思う。別の機関、別のシステムが必要。
- 特別な「心の教育」というのはおかしい。教育活動全般に「心」が必要だ。
- プラス思考のみ強調するのではなく、マイナス思考も大事にして体験させるべきだと思う。
- とても大切。相手を思いやる心。
- 自分中心の考え方を他人の立場に立って考えてみる場面を持たせてあげる必要あり。
- 取り上げてやるというのではなく、常々やっていることではないか。
- ゆとりがなく、子どもの心の中までとどくような教育がされにくい。教師や親などの人間的な包容力の大きさが大切と思う。大人が子どもの心にそって導いてあげたい。善悪の判断はもちろんだが、その上で豊かな心を育ててあげたい。
- 必要だと思うが、「心の教育」などと題名付けて、学校の間でいわゆる学校的教育するものではないと思う。

• まがいものだの一言。「思いやり」「真実」それらを本当に現在の社会で実践していったら、ある意味で（経済的に）弱者に陥ってしまう。そんな経済、社会体制をそのままに「心」のみを変えるというのは、まったくの偽善だ。

• 大人の目（親、教師、保母、おけいこごとの先生）のある中でばかり育ててきている。子ども同士の攻めぎあいや仲良しの感情体験が不足している。

• 子どもの個としての存在が。大切にされていない。

• 自己主張はするが、人の話が聞けない子が増えた。

• 人や物に暴力的に当たる子が増えた。

• 物が豊かな中で育つたため、物や人の“命”が大切に出来ない子が増えた。

• 他の年代の子どもとの交流をしない。スポーツの上手な子と苦手な子が互いにかばい合って遊ぶ場が無くなってしまったので、弱い者の事が分からない人が育っていく。

• 相手への思いやり不足。

• 自分を見つめること不足。

• 子どもが問題ではなく、親・社会・学校など全てを含んだ意味で環境が問題。

• 子どもが大人社会、大人の作った体制に異議を唱える方法を見出し得ないでいる。子どもは、大人社会の鏡、家庭に教育力がなくなっているというが、親も競争原理に組み込まれて生きていて、本当の生き方を見失っている。故にそのツケが子育てに回っている。

• 忍耐力の不足。大切にされているせいか、自分が偉いと思いをしている。勉強だけやっていたら良いと思ひ込まれている。

• 家でも学校でも、叱られることが少なく、善悪の判断が付きにくくなっている。

- 周りがいろいろ設定し過ぎるのが問題だと思う。親・教師・教育・社会の中に問題がある。
  - 子どもらしいのびのびした遊び体験、生活の体験不足、またそのような環境。
  - 少子化が進み、家庭では大切に育てられ、学校でも子どもの人権を大切に教育活動を行なっている。心弱い子どもが増えているように思える。常に周りの大人を頼りにしていて、強い意志を持っていない子どもが多い。
  - 自分らしさが持てない。出来るのが当たり前、出来ないといけないと思っている子が多く、出来ない自分へ不満が募っていくのではないか。実体験、失敗する経験が少ない。
  - 子どもは、子ども社会の中で、大人社会と同じように気を遣い、ストレスを感じ、生きにくくなっている。人間関係が希薄で、他人のことを考えられなくなっている。
  - 理想を持ってない点／我慢出来ない点／物中心主義。
  - 忙しいこと／遊びがないこと。
  - 仲間意識の欠落。人の痛みを感じない／自制出来ない。
  - 子どもの問題は大人の問題。子どもが夢を持ってない大人社会。尊敬出来ない。
  - 今までやってきたことに改めて声高にいわれることに多少抵抗を感じる。マスコミ等「心」を大切にしない社会の中で、学校のみで動いても無力であろう。大人が社会全体で見直す時がきている。大人が流されているものを子どもに求めるのは無理とを感じる。
  - 学校だけで行なうのは難しい。小さい頃から家庭（地域）で行なうべき。
  - 心は教えられて身に付くものではない。人と人との自然な繋がりの中で、身に付いていくものだ。
  - 心だけを取り上げても解決にはならない。心の有り様だけを問題にしてもゆがんでくると思う。
- 現実の学校では、時間的なゆとりがなく、学業中心となってしまうがちです。心の居場所の保健



室でさえ、多忙のため充分に対応できず残念です。

特に思いはない。心を育てることは、人間として接している以上、いつも心掛けています。また、「やれ」と言われてやるものではない。

心というより生き方を学ぶ場が必要かと……

● 「心の教育」をやるには、クラスあたり三〇人が限度ではないか。

● 小さい時から心してかかること、そして反抗期にきちんと考えてあげる。

● 子どもの心が貧困になったということについては、実感している。ただ彼らのおかれた状況を考えると一方的にせめることはできない。

● 心を「心の教育」というくくりで育てたり、教えたりすることは出来ない。育つ心を支えるような教育システム、学校を作っていくことが必要。

● 心の教育だけを取り出して話しても、子どもを変える力にはなれない。教師が時間をかけて子どもと接する「ゆとり」が何よりも必要だ。

● 自分の生命を実感できるような生活をさせられないだろうか。

● 社会全体で行なっていくべきもの。学校だけでは、「心」は育たない。

● 心は教えるものではなく、癒され育っていくものだと思う。何でも「教育」と付けて、押し付けていくのは、教育者のエゴ。

IV・学校にスクールカウンセラーのような第三者的な立場の方が入ることについてどう感じているでしょうか。

- ① カウンセラーの増員を図るべきだ……………二十一名(四八%)
- ② 現場の教員に研修の機会を与えるべき……………十四名(三二%)
- ③ 分からない……………二名(四%)
- ④ もっと議論していくべき……………六名(一四%)
- ⑤ その他……………一名(二%)

神奈川県教育文化研究所（県教文研）は、神奈川県教職員組合が主任手当の拠出金の果実を基金として、一九八〇年に設立した研究機関です。

県教文研の目的は、「県民の立場にたつて民主教育と文化を確立するための理論的並びに実証的研究と全国的な教育と文化運動を展開し、県民の教育文化の向上に寄与する」ことです。「教育シンポジウム」の開催も、目的に添った県教文研の具体的活動の一つです。

「教育シンポジウム」では今日的な教育諸課題をテーマとしています。そして、「教育諸課題」をめぐる、保護者・県民・教職員、研究者等で、その現状やあり方、課題について論議し理解を深め合ってきました。県教文研の活動が、神奈川の教育と文化のさらなる前進の力として生かされることを願っています。

「第11回教文研教育シンポジウム」開催にあたっては、共催をいただいた湖北教育文化研究所の島崎能充さん、吉川邦之助さん、小川清さん、曲大介さん、堀義秋さんをはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

（県教文研）

表紙カット 滝沢 博(県教文研事務局長)

\*\*\*\*\*  
\* 第11回教文研教育シンポジウム記録 \*  
\*\*\*\*\*

子どもを再発見する道を探る

—スクールカウンセラーをむかえて—

1998年6月30日

発行：神奈川県教育文化研究所  
横浜市西区藤棚町2-197  
神奈川県教育会館1階  
☎・FAX 045-241-3497  
印刷：(有)神奈川県教育企画  
☎ 045-253-3435

\*\*\*\*\*

**KYOBUNKEN**